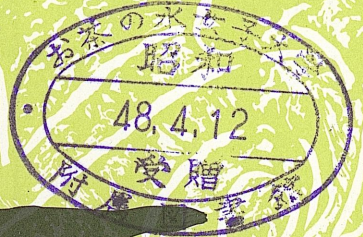


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

5



第七十二卷

第五号

日本幼稚園協会

幼児の 心理的発達

A 5 判 290頁 1000円

山下俊郎著

幼児は年齢に応じて、ものの感じ方、見方、考え方、行動に大きな違いがあります。本書は乳児から6歳児までの発達の歩みにともなう特質を年齢別にまとめ、運動の発達、知的発達、情緒の発達、社会的発達の4つの面から適切に説いています。

保育効果の 研究

A 5 判 392頁 1000円

村山貞雄著

保育の実践はいかなる効果があるだろうか。保育効果の問題をライフ・ワークとする筆者が、長年試みてきた歴史の接近法・質問紙法・観察法・内省法・実験法などの調査を集大成した保育関係者必読の書です。

幼児の心理 と教育

A 5 判 286頁 850円

藤永 保著

幼児の心理学の諸説を解説、検討し、著者独自の発達心理学の立場から、幼児教育のあり方、プログラムを組み立てた新しい幼児教育論です。

幼児の生活 と教育

A 5 判 350頁 550円

海 卓子著

集団の中で、子どもの認識がどう変化し成長していくか、「けんか」「リレー」「じゃんけん」など豊富な事例を通して体系づけたユニークな保育理論の書です。
(昭和41年度日私幼賞受賞)

すばらしい 幼稚園

—— よい保育の
探究 ——

A 5 判 318頁 450円

山本真市著

カリキュラムを考える前に保育の根本的な考え方を明快に説いた書。カリキュラムの実例のほかに、先生から幼児へ出す暖かい手紙の例など生きた材料が豊富に盛られています。

幼稚園実務 の手引き

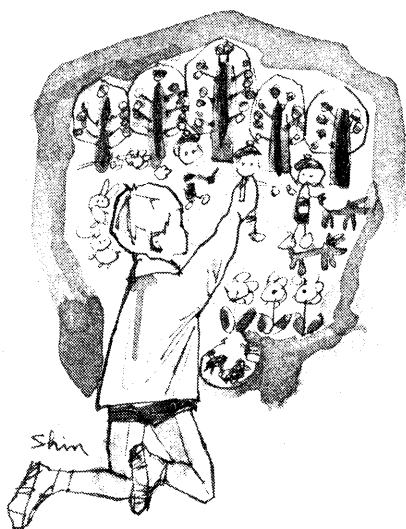
A 5 判 216頁 480円

松原梅一著

幼稚園行事の計画・健康診断の実施はどのようになればよいかなど、本書はこれら幼稚園実務の実際を30項目にわたって詳しく、かつわかりやすく説明した新任教諭または、新任教諭を指導する先生のための手引書です。

幼児の教育

第七十二巻 第五号





幼 児 の 教 育 目 次

—— 第七十二卷 五月号 ——

表紙
赤坂三好
カッ ト
斎藤信也

鯉のぼりとブリキの剣…………… か こ さ と し …… (4)

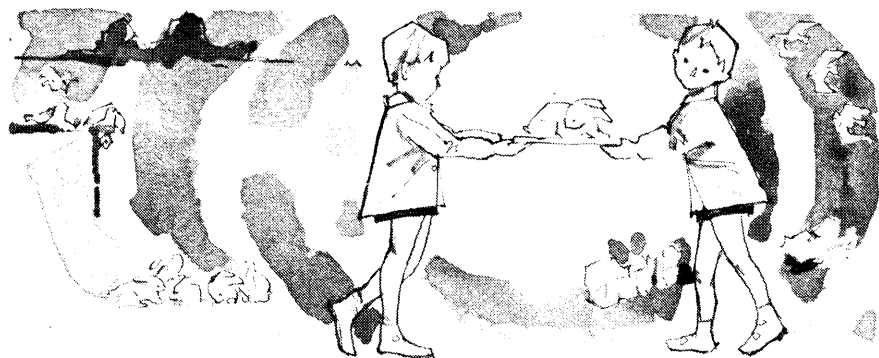
★講演

このごろの子どもと家庭

いろいろな実例を中心に…………… 森 田 宗 一 …… (6)

児童文学と子どものイメージ

—— 観察研究による児童文学への接近 ——…………… 本 田 和 子 …… (26)



「釜ヶ崎家庭保育の家」をおたずねして……………(33)

子どもの生きがい……………

北岡順子……………(40)

幼児教育の源流(Ⅳ)

——デイーステルヴェークの幼児教育論——……………

生馬寛信……………(47)

幼児の観察研究

——実現しようとする意志を育てること(2)——……………

津守真……………(61)

わが道をゆく……………

鈴鹿美和子……………(68)

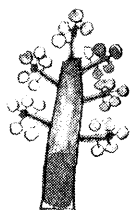
鯉のぼりとブリキの剣

五月近くになると、北陸のちいさな村にも、春はめっきり色濃くなってくる。遠い山の雪も少なくなり、黄や桃色の花が田んぼのあぜや山すそに咲きみだれる。

子どもたちは学校からかえると、先を争って外へ出る。その兄や姉たちの帰りをまちかねていたちいさな子も、その後についてゆく。せりをつんだり、たんぼを胸につけたり、色がきれいなレンゲの花をさがしたりする。土手にのぼると、鉄橋が赤く見え、貨物であるうが客車であるうが、ともかく列車が通りさえすれば、声をかぎり両手をふって万歳をさげんだ。日だまりに出てくるいたどりのふとい芽のシャリシャリとしたすっぱさと、ちがやの若い花の銀色のほの甘さが、子どもたちのそのころの季節のおやつだった。

あそびに夢中になっている私が、母によれば、後髪をひ

かこさとし



かれるおもいでかえると、タンスの中からのシャンとした着物に着がえさせられ、地主さんの家に行くのだからいっしょにおいでということだった。母に手を引かれながら、遠くの子どもたちの声をうらやましげに見返りながら、田の道を通ってゆくと、石垣をめぐらせた白壁の家がみえた。庭すみに大きな丸太がたっていて、それにつけた鯉のぼりが風にゆれている。まっすぐつけたのでは、余ってしまうのか、丸太のてっぺんから左右にひっぱったなめの綱に、大きなのから順にたくさん鯉のぼりがつけられている。こんなにたくさん鯉のぼりを、いったい何人の子どもたちがいるのだろうかと思って、だんだん近づく鯉のぼりの数を十六ほどまでかぞえていると、母が何やらの書き付にはさんだお金を私に渡し、おとさないようにするんだよと念をおして、私一人をその鯉のぼりの家へ行くようにおし

やった。

石の段々をのぼって、黒光りする玄関の戸をひくと、思いがけないほどすーとあいてしまう。つめたい玄関の大きな石の上にのったものかどうかと考えながら、それでもせいいっぱいのこえで「ごめんください」というが、しんとして、奥の方から誰も出てくる気配がない。困った私は、またせいいっぱい「ごめんください」と呼ぶ。とおくでハイというちいさな声が出たので、ほっとしているとやがて若いきれいな人が出て来る。「おそくなりました」と母におそわった通りの口上をいっしょうけんめいに言って、これまたしつかりにぎって来た、書き付とお金をさし出す。女の人はそれをもって奥にきえる。これで役目はすんだという安心感から、私はそつとあたりを見回す。大きな植木鉢と画があつて、こんなにひろい玄関なら雨の日に遊ぶのにどんなにいいだろうかと考えていると、急にバタバタという足音がして、私よりちょっとちいさな子が、ブリキの刀をもって玄関の間を右から左へはしりぬけた。そのはしり去った奥をのぞいていると、女の人がさっきの書き付をもつてあらわれた。そして「ごくろうさんでした」といってお菓子の紙つつみを私の手にもたせた。もらったものか

どうかもじもししていると、ふいに女の人のうしろから、さっきの男の子が抜身の剣を「ヤイノ」と私に向かってつき出した。私はおどろいて玄関をとび出てまっている母の所にかけて行つた。

かえり道、そのななめの綱につるしたたくさんの鯉のぼりと「ヤイ」とつき出したブリキの剣がいつまでも私の心に残っていた。

それ以来、地主さんの所へ地代をもってゆくのはいつも私の役目になった。帰りぎわにもらえるお菓子のうれしさに、内心よろこびながら、ヤイといった男の子を半分おそれねたみながら、六歳のときからほぼ二年、私はその石がきの家を毎月訪れた。

五月といえば私は四十年前のこの北陸の春を、そしてたくさんの鯉のぼりとブリキの剣をなつかしく思いおこす。今年も家々に黒や赤の鯉のぼりの季節となった。私の心の中にもあやしく鯉のぼりが泳ぎ、ブリキの剣がキラリと光ることだろう。

(児童文化研究)

◇ 講演 ◇

このごろの子どもと家庭 いろいろの実例を中心にして



森 田 宗 一

かれこれ二十七、八年になります。私は問題の少年とか非行少年といわれる人たちと長いつきあいをしてきました。少年裁判官というのが私の本職ですが、同時にひろく青少年、子ども、家庭の問題にはいろんな面から関与してまいりました。また私も人の子の親でございまして、しがない親の稼業もしております。

私とお茶の水女子大学とは、これも長いえにしで、倉橋惣三先生との出会いにはじまります。それは三十何年も昔のことでございます。そうした縁で、家庭教育などという講座をうけっております。

はじめに

遠慮なく申しあげることがいくつかございます。その一つは、このごろの子どもと家庭、親子関係、親の姿勢、生きざまについてです。一般にインテリなどと呼ばれる家庭にどうでもいいことをあれこれ細かく気を使いき、これとこれだけは許したいということにすっぱぬけがあると思います。いわゆる非行少年、問題児の生活史を見ると、なまじ親がインテリで物に恵まれている家庭に、何か大事なことが欠落し、つちかわれていないと思われる例が多いのです。『気はやさしくて力なし』と私はいつも彼らを愛称をもってよんでいるのですが、『力』ということが問題で、これは幼少時から人間関係の中でつちかわれるべきものがつちかわれていない。そこに問題があると思います。

少年事件を処理するには、教育的観点を中心に、よろずのこ
とを調査するわけです。生活歴、家庭環境、特に彼らの性格な
どを調べて、それにもとづいてその処理をきめるわけなのです。
家裁の調査官や鑑別所の先生から、親もあれやこれやと聞いて
いるはずなのに、さて処方箋を書く審判廷で親がよくいう言葉
は、「家の子にかぎってこんなはずではございませんでした」。
これは聞きなれすぎている言葉です。時には「何不自由なく与
えておりましたのに、何ということでしょう、できそこないめ」
ということをいう親もあるのですね。そしてそういう子にかぎ
って、「おれ一人でこうなったんじゃない、でかされたんだ」
と語っている。そんなことをいわせておいていいとも思いま
せんが、どうも幼少時にさかのぼりますと、「出かされた」とい
う方が正しいように思います。そして、彼らの未来を開くため
に、おくればせながら十数年をとり返すべく、母子の再会の最
初からボタンのかけちがいである、少しずれていたというこ
とを指摘するのですが、わかってもらえない。しばらく家庭から
離さざるを得ないのは、こういう親子関係の自己省察のない場
合にあるんですね。

出会い

人生は出会いということですね。出会いとわかれの連続でし
ょう。このごろのケースに著しい傾向は、まことの出会いがな
く、本当のわかれがないことです。過保護というのもその現象
の一つだと思います。もう十五、六歳になった非行少年の場合
もそうです。親子ベツタリで本当の出会いとわかれがないので
す。幼少時からそうですが、十代になった現在でもなおかつそ
うです。今の時代に子どもを育てるのに、親も悩み、いかに難
渋しているか、政治や社会、（政治のことは時期が悪いから申
しあげませんが）の犠牲者であるともいえるかもしれません。
しかし問題を家庭にかぎれば、やはり問題は親にあり、親子の
出会い、つき合い方の問題です。十五、六歳の少年が立居、ふ
るまい、の基本ができていないのです。母親への依存が目立っ
ている。こちらは、ヤングジェントルマン、レディーと思っ
て話しているのに、ウンでもないスンでもない。イエスとノーの
返事もよくできない。まるで幼稚園、小学校の応答やしつけの
訓練の場面なのです。この年齢ならこの位のことがこういうふ
うにいえないや、というような、人生の九九というようなもの
ができてない。そのくせアフリカの最南端には、どんな島があ
ってなどということをきけばこっちよりよほど知っている。そ
こでドアの入り方から「やりなおし！」というのです。それが

少年審判廷の光景の始めです。

そういう少年のお母さんにかぎって、それを当り前のように見すごしている。つまり十数年の最初学歴というべき家庭で幼少時にしておけば何でもないことがしてない。その基本ができていない。そういう子どもに、幼稚園でも小学校でも中学でも、十分な行動のしつけをしていないみたいですね。そのまま大きくなってついに高校になり、大学生になったという若者たちです。今思い浮かべているある事件の少年たちの生活史も、まあそんなふうでした。

子どもは家庭に生まれ育ち、まず母親と出会い父親や家族と出会って、人間らしく成長いたします。しかしやがて別れのつらさを感じながら（とくに母親は）、独立人として成人していくのです。三歳児ころからそういう出会いとわかれの体験をつみ重ね、十代の終わるころは、社会人として新しい船出の必要があるわけです。乳幼児の時は、濃密な出会いが大切でしょう。愛撫とか何くれとない世話など。しかしいつまでも親の気持ち（本能）のままで、子どもの本当の成長ははばまれ、スポイルされてしまいます。わかれのつらさの実感の中に人間の教育があるのですね。

言い上手・きき下手

このごろの子どもの特徴はいろいろあります。二年おきぐらいに、子どもの様相はかわっているといえましょう。いちじらしいと見えるこの数年来の特徴で、年毎に強くなったと見られるひとつは、「言い上手だがきき下手だ」ということです。なかなかうまいことを子どもはいいます。作文とか俳句だとかは大人の世界に対するユーモラスな痛烈な異議申し立てであったり、観察であったりする。そういう、表現することは非常に感心することが多い。しかしあまり感心しっぱなしではいけないと思います。言い上手の反面きき下手だ、人のいうことをよく聞いてそれに対処するということの練習ができていない。聞き上手はよろず物学びの始めです。それができていないということです。子どもは母親と出会っているうち、よく聞き、耳をそばだてています。だんだん聞いていて口まねや、練習して言葉を覚える。その言葉によって考えることを学び、行動の基本を学ぶわけです。つまりきき下手であるということはそれだけ前頭葉が発達しないということであり物学びはおくれるということになるわけです。

ところがこのごろきき下手が多い、きく練習がない。その原

因を考えてみますと、いわゆる情報過多ということが一つある。現実にはテレビとかいろんなことがあります、同じ環境、条件の中でもきき上手になる子もあるということから考えますと、やっぱり家庭での親の態度、子の心がまえてないかと推論できるわけです。つまり親が、とりわけ母親がいい上手だがきき下手だということの子どもはきき下手で、素質はいいのに何ともうまく進歩しない。小学校へ入って学習不振児にもなりかねない。人間性の基本を培うこと、つまり前頭葉を養うことを忘れている。よろずきき上手の練習からという教育の基本がそろそかになっていくのです。人間をつくるしつけとか訓育とお勉強とは別のことだと考えてる、今日の教育の間違った常識の中に、いかに子どもがゆがめられているか、お母さん方はまたそういうムードの中でいかに無駄な苦勞をしておられるか。なまの事実が示しております。

子をもって知る子の恩

「子をもって知る親の恩」ということわざがあります。しかしほんとの親の実感は、「子をもって知る子の恩」ということだと思います。子どもによってどんなに親は人生を学ばされるかわからないということです。

私の今日扱ったある非行少年ですが、ずいぶんいろいろなききつがあつて、このごろやつと落ちつきました。お母さんはこの一年で四キロも肥ったと喜んでいい顔をしてました。一年前は四キロやせてたわけです。骨身をけずる親の思いだったわけです。そこで私はいつも少年たちに、せめて親をやさせないように、あるいは「子をもって私はよかつたなあ、生きがいがあつたなあ」と感じさせる子になりたまえ、というのです。「子をもって知る子の恩だったなあ」と親に実感させる。それこそ大変な親孝行だと申すのです。よく考えれば、ほんとに子を持ち子とながいつきあいをして感ずるのは子の恩ということですね。

また、古い格言に「親の心子知らず」という言葉がありますね。親の気もしらないで、といった例がたしかにあります。しかし、いろいろな実例を見ますと、「子の心親知らず」ということの方が多いと思います。子どもの本当のニード（願ひ）を知らず、親の思いだけで子どもを扱う。「何不自由なく与えてさせてやらせていたのに、こんなことになって」などと嘆く親があります。非行に陥り易い性格を作ってしまった子の本当の心知らずが多い。動物は、自然が欲望には止めをしているのですが、人間はそれを小さい時から練習せねばならぬ、どう処理

するかということを学ばなければならない。それが人間の本当のニードであり、教育の基本です。そのまことの育つ者の心を知らねばならない。つまり「おあづけ」の味が大切なのです。そのことが忘れられている。お預けなんて今の学生にいいですと、銀行へお金をあずけることかと思う（笑い）。そうじゃなくで欲望と物との間に距離をおいて待つこと、人にゆずる心、ともに分け合う、そういうことをいうので、これこそまさに人生の基本の九九の一つだと思うのです。今日のような消費社会においては、そのことを家庭でこそ、幼少時の教育でこそしないでどこがしてくれるのか。もちろん消費社会の中に流れてしまいう。それが日本人の現在の姿なのではないでしょうか、明日の日本は危い、と私共が思う一つの理由なのです。『子の心を親知らず』という方がむしろ真実ではないかと私はいいたいのです。親の心子知らずも困るけれども、公平に科学的に見ますと、子どもの問題の中では子の心親知らずという方がどうも真実のようであります。

母乳栄養の意味

事例に入る前に、この道の権威円城寺宗徳博士（九大の学長をなさった小児科医で、幼児教育の先達である方）がある座談

会で母乳と人工栄養のことについていいことをおっしゃっているのがあります。「母乳は練習しなければ出ないものだ。よろず生まれること、物事にはいたみがあるものなのです。最初はいたいし、吸わなければ出ないし、根気がなければ出るものではない」そう言われるのです。そういうふうにできているんです。

ポルトマンという人の学説によれば人類は早産しているという。何のためか。それは人間性の基本を親子の出会いの中で学ぶためだという。つまり早く出すぎているのです。いろんなことを練習しなければできない、その練習の中に人間性の基本の最初学習があるのです。「おっぱいが出ないからといってすぐやめちゃったりする。一カ月、二カ月やっている内にだんだん出るようになるのに、待つ心が無い、これが人工栄養の多い最大の原因だ」と円城寺先生はおっしゃっています。おまけにこのごろは「おばあさんの声援まで加わって、大急ぎでミルクを買ってきてのませる、すると子どもは出にくいお母さんのおっぱいを根気よくすってのむよりもらくなミルクの方についてしまふ。人間は安きにつく人にならないのです。そして出るべき母乳はますます出なくなってしまう。それが母乳栄養減少の大きな原因だ。子の心親知らずがたくさんあるのであって、子をし

ていわしむれば、「お母さんたちあわてなさるな、もう少し私に吸わしてくれ、吸い出してみせる」というのでありましょう。こうした、子どもの内にある、母乳を吸って生存しようというすばらしい力を私たちは信じて育てていくことが、まず必要である、このことこそ育児の基本なのだ」。そう言われる。これはおっぱいのことだけじゃないと思うのです。さらにいろいろ教育的なことに関連し、つながっていくわけです。

父親の出番

身近な実例に入りたいと思いますが、あまりにも多くのことがありすぎるような気がいたします。焦点を少ししぼっていきたいと思います。

子どもが小学生ぐらいのお母さんたちの悩みといいますと、まず勉強のことですが、このごろは自閉的な、けんかもようしない、がき大将などという性格の子がない。山へ連れてつても、野原へつれてつても遊ぼうとしない、どうしましようという相談がよくあります。

それから、これは小学生ですが、小学上級、中学ぐらいになると、父親が出番をしてくれない、という。何といっても母子関係というのは最初の出会いですが、幼稚園、小学校下級生ぐ

らいまではお父さんは育景、間接で、お母さんが直接責任者、いわば最初学歴の園長です。お母さんを通じていろいろなことを学び、時々お父さんが講師みたいな役をする。あるいは私立学校の理事長みたいな形の機能はあるわけです。ところが中学生くらいになると、もうお母さんでは間に合わなくなる。お母さんでは足りないのではなく、父と出会いたい、胸をかりたい、人生を生きていく父親がこういう時はどういうふうに考えるか、社会はどうなのか。時には、いけないことはいけない、社会ではそんなことは通らんぞということを親からききたい知りたい学びたい。これが子どものニードなのです。ところがお父さんがさっぱり、忙しい忙しいと逃げたり、自信がない、よきにはからえ女房よ、（笑い）そんなことで父親が出番をうけてくれない、ということは真面目なインテリの家庭などにえてて多い。

このことについては「婦人の友」の六月号で、「家庭はどこへいくのか」『不安定なこの時代に親子関係の根元を問うてみよう』というような座談会をいたしました。話がひとわりすみました時に、出席者の中の母親代表の方が、まっていたとばかりいったことがまことに印象的でした。このごろの家庭の中で父親のあり方、とりわけ男の子の場合に非常に悩みが多

い、とご家庭のことをいろいろとおっしゃいました。こういう時に父親が出番をしたらどんなにやりいいかと思うのに、出てくれないもんだから、ついいらいらしたりしてうまくいかない。ということのをべられたあとで、第一私たちの年代は、父親としての出番をしてくれない、娘や息子との出会いをしない、そういう夫をただ見ながら、気をもんだり、期待しております。実際のところ、息子を叱ろうと思っても、脊が高くなっている、仰向いて叱らなければならぬ(笑)。そういう時にお父さんが出てきてくれたら、あとはこちらがやるのという気持ちなのですね。そのあと中学の女の先生が、『そうなんです、学校教育でも小学校上級から中学となりますと扱いがどうか、非常に頼もしい子か、ということとは父親とのつきあいがどうなっているかということとわかるんです』とおっしゃってエピソードを一つお話しになりました。それはこういうことです。

生徒たちが大変緻密に伊豆一周のサイクリングの計画をたてた。計画は大変よくできていましたが、一応その親に了解だけ得るために電話をかけた。ところが、電話口で最初お父さんがでてきてもさっぱり用をなさない、『学校のこと、子どものことですか、それじゃ家内とかわります』(笑)。そういう時家

内(母親)の方が出ると話が長くて、持物がどうか、どんな恰好がいいですか、ということになるでしょう。お母さんがそういうことを心配なさるのは、母性本能というか、らしいと思うんです。母親が『そんなことはあつしにかかわりのないこととでござんす』などといったらどうかと思います(笑)。しかし今はそういう問題でない。お父さんが出番をうけてほしい場面なのです。

非行少年の場合にも、父親が出番をうけない家庭が多いですね。中学生(あるいは小学上級生) ころから以後の子どもについては、どのように父親の役割を果たさせるか、たしかに今日の重要な問題だと思います。

父子関係のむずかしさ

親子の関係、そのつきあい方を考えると、最初の一年は母親の体内の延長であるといえます。そのころはお母さんとの出会いが主でしょう。やがて次第に父親とか兄弟とか家庭内外のいろいろな人との出会いをして子どもは成長するのです。「お母さんはいてほしいなくてはね人だけれど、いつでもいなければならぬ人でなくなってくる」とある中学生の日記に心にくいばかりの表現がありました。お父さんの出番になってくるわ

けですね。女の子にとつては最初の彼氏であり、男の子にとつては最初の先ばいであり人生の先達であり、そういう人と出会いたいだろうと思います。

母子関係はいわば、大地にまいた種子が芽を出し、移植されて、大地から分離して成長していくものです。セパレートしながら再会し、母子が互いに成長をしていく。親から学び親も子から学びながら、母子わかれの辛さがあるでしょう。いたみもあります。その象徴は陣痛です。あるいは、三歳の時、十五、六歳ごろには「私より好きな彼女ができた」と眼をつりあげお母さんもあります。寂しさもあるにしても、見守る必要があります。と思います。

男親にはそういうものはありません。おれよりも好きな彼氏ができた、いいじゃないかとまず思うのです。父親と子との関係はかなり精神的なものではないかと思ひます。母子というものは生物学的生理的な基盤がある、大地性とでも申しましようか。わかれのつらさを感じながら、子の成長を見守る忍耐をもって再会をするかどうかということが、非常に大事な青少年期の母子関係だと思ひます。

形成される父子関係

法律には、離婚して六カ月たたないと再婚できないということになっている。ちょっと妻に不平等のようですが、これは生物学的なことから、子の父性を混乱させないための知恵です。同じようなことが男性の方にもあるのです。婚姻中の妻がみごもって生まれたるは、夫の子とみなす」と民法にある。みなされちゃってるんです。本当に自分の子かどうか証拠はない。子の母を信用しているわけです。その信用という精神の上に、父子関係は次第に形成されていくのです。

「おれの子だ」という保証は、精神的に「おれの子に違いない」とその母親を信用してるといふ精神作用だけなんです。九九・九パーセントは信用しても一まつの不安というものはあるものです。そんなことを男どもは時々冗談まじりに話すことがあるものです。父子関係というのはこのように形成されていくものなんです。したがって肉親の親子といひますが、母子関係ではお腹をいためたかいためないかというのは重大な問題になるのです。大地と、そうでないところから生まれてきた子どもを違う大地で育てるということは、科学的に重大な事実だといひのです。父子関係でむしろ大事なことは、生まれてからだんだん父と子が接近し出会ひ、つき合っていく間に、九九・九パーセントの残るあいまいな所も確たる事実として形成されて

いくものです。子どもの方だって初めは父親とは妙な人間に見えるでしょう。たびたびの出会いの中で、これは母親のただならぬ相手だ、父親というものだということを知っていくわけです（笑い）。これが全然離れっぱなしだったらどうでしょう。

「藍より青し」なんかは理想的に描かれていますから、あの子は全然お父さんを知らないんだけど、お母さんを通じて、お母さんが写真を出したりいろいろしてるからお父さんお父さんていつてます。それは一種の教育ですが、子どもの生理的、心理的実感としては、離れっぱなしのお父さんをお父さんと思うはずはない。思うのは、お母さんがどう思っているかの反映につながってます。むしろ接近しつき合ってくれる父親を、好奇心ながら、ああこれ、父っていうものはこういうものかというのを確認して形成されていく、そういうつきあいというのは非常に大事なんですね。

幼少時には父子関係というものを形成作用として、そういうつもりつものものがあって出番というものができるわけです。そういうものを全然ゼロにしていたら、急に中学生になったからといって、さあ出番だ、出会いましょう、なんていってもそういうわけにはいかないし、息子、娘の方だって準備段階がなくてはそう思うようにはいかない。むしろ不自信、お父さ

んがいけないことになってしまう。するとお父さんにかわるものを先生に求める。それも自然ですが、先生で与えられない場合が、残念ながら今日の教育においては多い。中学生など殊に男の子が、大事なことを誰に相談するか、「先生」というのが非常に少ない。ではお父さんはいくともこれも少ない。どうも出番をうけもっていない。よきにはからえということになっていく場合が多いようです。お母さんだけでは用が足りない年ごろになって、父の出番がなく、先生が、それに代る、または人生の先輩としての役わりをもたない。すると深夜喫茶とかあいう所に出入りするあんちゃん、やくざの親分とかいう人の所に長居をするようになる。「あの連中は何がなくても人情がありますよ、パンチがあります。それが魅力です」そんなことをいう少年が少なくないですね。当たらずさわらず、見て見ぬふりの無関心みたいな親子、師弟の関係。そんななまぬるい芯のない人間関係からさまざまなひずみがおこっているわけです。まず「おやお袋の味」の復活ということが肝要だと思います。

——ぼくは六つになった——

ここである美しい詩の一節を紹介いたしておき、このことの結びとしたいと思います。それは周郷先生の名訳があるのです

が、イギリスのアラン・アレキサンダー・ミルンという人の詩です。ミルンという人は、世界中にやまれている有名な「熊のプーさん」の著者です。その人が「ぼくは六つになった」という詩を書いています。ゲゼルという心理学者によると、人間は十五、六歳になるまで、人類がこの世に生をうけてから十教万年の一万年ずつを体験するものだ、だから三歳ぐらいまでは原始生活時代、大いに原始生活を体験させよという。その六歳ごろまで（いわば人類が六万年ぐらいたった時代でしょうか）、そのころまでの子どもの正体とニードを实によく一行ずつでいいあらわしていると思います。今の教育に、この単純と見える一行ずつのことがわかっていない。実現されていないのです。昔の親の方がよくわきまえていたと思います。五十年前のわれわれ子ども時代の素朴な親が、そのかなめの所だけはちゃんとわかって子どもを育てていたのではないかと思うふしがあります。その詩は次のようであります。

一つときは

なにもかもはじめてだった。

二つときは

ぼくは まるつきりんまいだった。

三つときは

ぼくはやつとぼくになった。

四つときは

ぼくは大きくなりました

五つときは

なにからなにもで おもしろかった。

いま六つで

ぼくはありったけ おりこうです

だから いまでも六つであります。

一つときは、胎内延長の一歳時、何もかも始めて。始めてということは非常に大事なことです。

二つときは、いろいろなことを、今度は一人の個体として経験できるわけです。ところがよろず新米でうまくいかない。そういう場合、親がどういうふうに新米に対処するかというのが

大切です。芸事のおけい古を考えてみるとよくわかりになると思う。新米はどうせ失敗したりうまくいかないでしょう、だから新米はならいに来ているんです。それを二つの、間違った態度は、自分の方のます目で、だめじゃないですか、そんなことでは」と新米をけなしてそのあげくに「この間弟子入りした誰々さんは来た時からちゃんとそんなことができます」。こんなことをいわれたら、「どうせ私はそうでしょうよ」とか劣等感をおこすか、ひがんでしまつて新米から成長していかない。これが育て方の間違いで、「三つはめて一つ叱れ」ということわががあります、ほめて引きあげてやらなきゃ新米はだめになります。

そうかと思ひますと、新米のさせるつ放しにしておいて、いつまでも指導をしない。時には手をとつて親切に導いてやらねばならない。これを今の親にあてはめ、教師にあてはめた時、二つの大きな間違いがうかびあがつてまいります。切捨て教育エリートばかり珍重し、人間を育てようとしません。ちよつとおくれるか、もたもたしているとおいてけぼりに切り捨てられてしまふ。これは管理体制の切り捨てごめんの教育。そうでないと干渉し過ぎの過保護、ということになります。

けさも、私の家の近くに幼稚園がありますので見てみますと、

子どもたちは道をまっすぐいかずに土手にあがつたり走ったりするんです。お母さんより先に友だちと行つたりしようとしません。あぶないあぶない、およしなさい。お母さんと手をつないでなさい」「さっきいったでしょ、お母さんと手をつないでいくの!!」まるでサル廻しのサルです。ころんだりすると、「それころんだ、だからいわないこつちゃんない」。ころんだりおきたりするからいろいろ覚えていくんです、そのかわり新米のころは手をちよんぎったりする力がないから大丈夫です。

そういう練習をしないでいると、やがて行動半径が広がつて体力もついた時に、命にかかわるような事故をおこす、事故をおこしやすいようになる。危険を、危険として対処できない子どもは、大体新米を扱い間違えたいわゆる過保護というか、先廻りして全部危いものを取り除いちゃう、そういうふうにした子どもで、三年後五年後の実例がたくさんあります。ぼくはまるつきり新米だったという発言はすばらしいと思います。

三つのときは ぼくはようやくぼくになった

これは大変すばらしい。原語は I was hardly ME とミィが大文字になっています。これは意味深なんです。やせてもかれてもおぼつかないながら私でありぼくである。「三つ子の魂百まで」という。親も奪うべからざる子どもの魂の世界、

聖所 holy place がある。その前にわれわれはたたずんで、ようやくぼくになった、おぼつかない子どもに、畏れを感じる
ところから、第二の教育が始まると思います。同時に、親の生
き方、横顔、うしろ姿、とよく倉橋先生はいわれましたが、親
の一番大きい影響がそこにあります。

四つのときは ぼくは大きくなりたかった

五つのときは 何もかもおもしろかった

ギャングエージといいますが、おもしろくてたまらない時代
です。男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく、いろい
ろな遊びをしたりけんかもしたり、つまり成長してやまざるた
くましい力を（現実にはそうでない子もできていますがこれが
自然の姿です）もっておもしろくてしょうがない。

今は六つで ぼくはありったけお利口です。

だからいつまでも六つでありたい

自然的には、もうこれでこのままで終わっていいのだが、人
生とは、人間の社会生活とは、これから始まる。そこで六歳に
なったらおおよけの教育に入れる。親だけでは足りない。学校
教育は、この時から始まるというわけです。六歳児までの間
に、おぼつかないながら私であったという三歳児を真中に
して、ぼくはもうありったけお利口ですという時から、社会生

活に適應していく人間形成が始まるといえましょう。

私も非行少年とか、問題児、また教育相談などに登場する
臨床の実例を見て、大きな社会問題だと思っています。しかし、に
もかわらず、六歳児ころまでの家庭のあり方、親子のつきあ
い方、その間に形成された性格、人生の九九、情緒、基本の
ものが身についているかどうかということが勝負の始めだと思
います。したがってもう一度、一歳児、二歳児のころにかえつて
総反省をして、親も子も、せめてお母さんと娘、息子とが、と
どもにもあすを見すかして今を考えなくてはならない。昨日ま
ではかりに全部失敗でも、今日から明日から、というのが教育
の姿勢だと思っています。いろいろな臨床の実例をみますと、ま
さに幼少時の親子関係の中に大きな問題をもっているというこ
とは否定することはできません。いかに社会の影響の大きい今
日でも……。

あの連合赤軍などというところでもない事件でも（新聞などで
は家庭をとがめすぎていますが）、やはり何か共通の問題が家庭
にあったともいえます。一人の親は愛知県の著名な教育者
です。死ぬのはたやすい。しかし自分は生きて子の負い目を
脊負って、親とはいったい何だ、ということに耐えていきたい。
そして願わくばせめてもう一度、誰か一人でも息子が帰ってき

たならば、もう一度あのころ、子どもの中学生のころ になってみたい。そのころは自分は学校のことが忙しくて息子たちと出会わなかった。そのころに帰って見たい”といった大変素朴な、悲痛なことを世に発表しておられます。

これは極端な事例ですが、もう一度この詩の意味を考え直していただきたいと思います。

悲しい事件二つ

この間私が扱いました事件があります。高校一年生の息子が母親をナイフでさして即死させ、それをとめた姉さんを大怪我させるという事件がありました。

どうしてこんなことがおこったかというと、ほしい物を買ってくれなかった。お金には余裕がある。それがくせ者なんです。子ども自身も三十六万円貯金してる。そして自分の物はおれの物、親の物はおれの物というような思想なんです。そして日曜日にお母さんにねだったわけです。兄弟や友だちが少い、これも問題なんです。そういう子どもは生き物を友だちとしたいというのは人間の自然的な姿ですね。それで何か名のある犬をほしがったわけです。それと自転車、それもオートバイのようなもの。しめて八万円くれ、即刻くれといったのです。＼そん

なことできない、あんだってたくさんもってるんだから、明日銀行へ行っておろしていらっしやい”というところ、ほしい、今、くれ”といったきつかけで、「おれのいうことをきかないお母さんだからナイフでさし殺してしまった」というのです。何という恐ろしいことでしょう。行偽は異常だし理解しにくいくらいですね。しかし、それもさっき申したように、おあずけがあったかどうかという素朴なことに帰するわけです。これは極端な例ですが、これに近い一触即発の例は実にたくさんあるのです。

逆に子どもをつまらぬことで殺してしまう親もずいぶんある。動物の世界にはないことだそうです。この間も新聞に、子どもが泣きわめきやまらない。お父さんにもおばあさんにもうるさいといわれて、頭にきて、子どもを団地の四階から落として殺した。あるいは首をしめて殺したというのをみました。これも極端なように思われますが、よくある例です。育児ノイローゼです。子とのつき合いをしらず、あるいは待つ心が無い。子どもが泣いているニード、願いごとの意味を、実感していない。そういうことが、子どもが親を殺し、母が子を殺すという異常事につながります。そこまでいかなくても、都内の病院などで蒸発ママというのがずいぶんふえてきてます。生むだけでも

大変、あとはよろしくたのむ、というわけです。

それから、幼児から小学生、上級生になりますと、いろいろな社会の悪条件の中で、公園もない、遊び場もない中で子どもは抑圧され、そういう中で子どもはゆがんで、もやしっ子とか、
“気はやさしく力なし”とだけではいい表わせない子どもが登場してきています。これはやはり家庭ばかりでなく、教育の場の荒れ方、世のすさび、子どもというものに必要な物が与えられていない、そういう状況の中で子どもは、もやしなどというのほほんとしたものでなく、何かひねた、小生意気な子がふえています。残念ながら、ちびっ子アニマルなどと呼んでいる人さえいます。

自殺の年齢低下

その現象はゆがみのいろんな行動に現われますが、まずこのごろ、中学生ぐらいの四無主義という、無気力、無責任、無感動、無関心ということがいわれています。人のいたみをいたみと感じ、喜びを喜びとし、欲望を抑制しそれをさらに浄化し向上することができなければ、動物以下になりさがるのです。まさに母親を子どもが殺したり、母親が、泣いたからといって子どもを殺すというようなことは動物は絶対にしない、できない、

怪物のすることです。また四無主義といわれますが、さらに悲しいことには年齢低下の現象がみられて、これが小学校上級ぐらいにまでさがってきたということに、「自殺」があります。

昨日まで元気だった、元気だったと見えた子に、気のやさしいセンチブルな子に多い、というから余計悲劇なのです。しかしかなり共通しているところはある心理学者の分析ですが、恵まれた家庭で甘えて、欲求不満にたえきれない子どもに多いという。また、死に急ぐ子どもの問題で重要なのは、乳幼児期の精神衛生であると書いている人もおります。子どもはたえられない状況からにげようとして自殺するという西洋の学者の言葉をあげて、精神衛生が大事だ、今日のような状況であるがゆえに子どもの自殺の場合は、周囲の大人、親にも家庭にも非常に責任があるということをいっておられます。ある中学生は、遺書に、親への不満、教師への不満をのべ、相談する人がいなかった、友だちがいなかった苦ちゅうを述べて結んでおりました。ある女子の高校一年生は、けごんの滝に身をひるがえしてとびこんでその遺書には「社会の問題がバリバリと胸をかきむしる」と書いている。しかしその家庭は、ソフトで恵まれた家庭であったという。それゆえにかえってどうにもたえられないと書いて死にました。

こういう例をあげますと、実に今や、あれすさんだ、子ども無視といつていいような状況の中で、やさしく、センシブルな四無でない人間的な気持ちをもった子どもたちがどんなに苦しみ悩んでいるかという現実。そして自殺の多くも、あるいはそれがとんでもない方向へ発足していくのにも、うつ病的な傾向が非常に蔓延しておる。休んでいるような学生などのかなり多くにこの傾向が見られます。そしてそういう子は大体良心的で責任感があるといわれる。少し線が細いけれどもセンシブルな、そういう少年少女がかかりやすい。今日のような状況の中で、悩み一つ知らず、眠れないことなんて一つもないなんていばつて政治家えらい人などは怪物ではないでしょうか。なんていたましいことの多い、眠られぬ夜々を涙ながらにパンを味わい、眠られぬ夜々を重ねた人ではなくては人生を語るにたえない」というようなことをゲートはいいましたけれど、今やゲートの時代などからは想像を絶するような悩ましい時代です。

そういう中で、人間的なものをもった若者ほど、死に急がないうまでもうつつ病になり、あとはずっつけて、自己を叱咤しながらも起きられない。すると親や先生は、急に怠けた、誰が悪い友だちでも出たのでは、といつて道徳的に叱咤激動する。これがかえって彼女彼らをいつそう絶望感に追いやって、ある日あ

る朝、プツッと糸が切れたみたいにずっつけて谷へ落ちてしまふ。死の中へ落ちてしまふという事例が、今日非常に多いのです。青少年問題の、今一番心痛める例はそういうことです。がき大将とか、やくざ仲間に入つてたくましいことをしている例は、年々激減している。少年院は閑古島がないている。けれども精神病院行き、心理療法を必要とする例がふえてきています。

ユーモラスな出会い

先日新聞に周郷先生が大変良いことを書いておられます。幼稚園のチンパンジーとの出会いということについて、教育に何かぬけ穴がある、そして自分は人間きらいだ、(とこのごろ先生はこんなことをいい出してきていらっしゃる、もともと生き物が好きな方ですが)人間も生き物だと思っていたが、人間は怪物性を示してきているので心やさしき人は、人間きらいになつて植物や動物好きになつちゃうんじゃないかと書いておられます。もう一度教育は、生き物や草花、生きとし生けるものとの出会いから考え直すべきですね。もちろん人間との出会いが目的ですが、まず生き者とのつきあいから幼児教育を始めなければいけないといつておられます。まことにそうだと思います。

また一昨日かの新聞には、今の子どもと教師は、夜の町では生き生きと眼を輝やかしているが、家庭と学校ではどんよりして、親も教師も無気力、火花の散るような出会いがないという趣旨のことが見られます。また、何か競争意識のはげしい子が友だちを殺して、誰かに殺されたのだと訴え出た、気はやさしくて力なし、もやしっ子とだけではすまされないエリート、何かぬけた少年の事例が報道されています。

さてこういう例を最後に申し上げておわりたいと思います。

それは、こういう時代だからこそ、出会いつきあいの意味を再発見して、わが家にどう表現するか、その中でどのびのびとエーモラスな出会いが必要でしょう。同時に、いけないことはいけないとし、何不自由なく欲望のまにまに与えていたのでは、動物以下にもなりさがれる人間という怪物であるという、「おあずけの味」をお忘れなく。もう一度あの素朴な、おあずけの味というのを再確認してみる必要があります。

私共の子ども時代になつかしいふるさとの味、おふくろの味、ああありがたかったなあと思うのは、葬式まんじゅうでしたね。あれ、一人じめしてたべたらどんなにうまいだろうと思うけれども、姉も妹も兄貴も、甘い物好きな年よりもいるとそうはできない。その内に母親から声あり、／＼宗一、仏様にあ

げとけ。それでおあづけです。すると今度は子どもながら前頭葉を働かせまして、あれいつおりてくるかな、と想像する、これは学問の始めです。大体、親父が帰ってくる三日目、あさつての晩の八時ごろ、その間気になってしょうがない。仏様は食べやしないけどねずみがひいたら困る、と見に行ったりする。

ああ無事だ、とついでにチーンとおがんだりする。そういうことから牛にひかれて善光寺まいりならぬ、葬式まんじゅうにひかれて宗教心へといったりする。さらに大事なことは、これも学問への道なのですが、どうせわってくうんだな、たてわりかな横わりかな、損はすまいと考えるわけです。さてその当日、母親がさっさっさつと切ってくれる。あ、たてわりだ、二日二晩考えたんですからさつと端を取った、ところが三角学をやったなかった悲しさ、はしは皮であんがが少ない。残り物をとった妹の方が小さいけれど皮は薄いしあんがつまっていた。平等にわかる天才の母にまかせておはばよかった、と思う。おまんじゅうの味はその中にありということを、しみじみ悟るのはあとのこと。

子どものその時に、ああありがたや、母の味、教育の味よ、人生への教育の味よなんてことは思いません。やっぱり食いたいな、一人で食ったらどんなにうまいだろう。とがまんす

るわけです。しかし子どもがまんなんてものはすぐ明日へと転嫁できる。今に大きくなったら自分でかせいで十ぐらい一人で食ってしまおう、そう考える。そういう日は、親がまさかと思うほど早くやってくるのです。私は十三の時に親を離れて働いていました。その時に一月働いたお金でおまんじゅうを四つぐらい買ってきて食べました。でも一人で食べたんじゃないです。一つ半ぐらいでうんざりしたことを覚えています。やはりああいうのは、手続きがあつて、おあずけの味があつて、わけ合つて比べ合つて食べりゃ、ちよつとのがまんだけれど、夢を将来に残して食べた味にまさるものはないと思つた時に、ありがたや、ふるさとの味よ、と評価するものではないでしょうか。

今日は消費社会だから、おまんじゅうのことかと皆さんは可笑いになるかもしれないが、これはテレビとかいろいろなことにあるはまるんですよ。私にとつてなつかしい幼少時のことをいったのであつて、物が変わつても、人間の欲望と対処するという基本においては何も変わつていないと思います。それで今、あえて実感をこめて話したにすぎないのであつて、皆さんは、あの話は葬式まんじゅうの話か、とたな上げしないで応用していただきたいと思います。

それから最後に、いみじくも家庭の出会い、倉橋先生じゃないけれども、正眼の構えの出会いばかりではつかれて精神衛生上よろしくない、親が教育者であるためには、真向きだけではいけない、横顔とうしろ姿がともどもに調和して始めて、親がよき人間を育てる心がでてくる、それは倉橋先生の書かれたもの、話の中にはたびたび出てきます。先生は生涯を育ての心、ま向き、横顔、うしろ姿ということをいつてこられました。私は今日ほど、その言葉、その心が回復されるべき時はないと思います。

その、ま向き、横顔、うしろ姿を今日の的に解釈するならば、ユーモアの心、余裕です、はばです。ペケ三つだって、七つマールがあるところ、夜おそくなつてしまつて、明日の試験はもうだめかもしれない、しかし合格するかもしれない、朝は「おはよう」といつてやつてくると見る心。それをお母さんやお父さんがまず回復する。明かるい面が必ず物事にはある。きら星のようなものがどんな子にもある。人みなに美しき種あり、ということを見てとつて、教育とは、育児とは何か考え直しましよう。はげまし、ほめる、そして叱るべき時にはま向きで叱るのもけっこうでしょう。しかし何よりユーモアなふんいきというものが今日非常に大事なのです。とりわけ日本の父親

は、家庭でさりげない表現をしない、おいしいものを食べてもおいしかったと評価をしない。そういうことがないために家庭がきずきず、じめじめしたりする。そしてどうしても母親が多弁になる、母よ、もう少し言葉をおしんで、父親がもう少しユーモアをもって社会の経験でも表現をしたりすれば、大体家庭教育なんてうまくいくんじゃないか。あとは政治とかそういう問題です。ところが母親がどうしてもしゃべりすぎる、それは父親が出番をもたないからです。

ユーモア—子どもの作品から—

最近、「親を見りゃぼくの将来したもの」とか、中学の先生が生徒の川柳と狂歌をまとめて親に訴えた本が出ました。これはぜひご紹介したいと思うくらいです。実に子どもはよく見ているもんだなあと思います。(まあいい上手すぎるような所もありますけれど……)

父と母 ふつうに書けば夫婦だが わが家はちがう夫婦だなあ

家庭とは父きびしくて母やさし それでいいのだ家はちがうが
いそがしいその一言でパパ逃げる

ばくとママ手を結びあい父を無視
参観日育中の母の目が恐い

誰さんに負けるなと母つばとばし
味噌汁を朝食べたいに母ねている

(なんて子どもの欲求は素朴でかわらざるものかと思えます
すね)

耳ふさぐ母たち話すいやらしい
(中学生にもなると清潔感というようなものが皆さんだっ
てあったと思います)

はずかしさ暑さと共に母忘れ

おれ男 少しは気にしろ夏の母

兄、兄とおれは兄貴のあまりかな

姉さんはおきれいですとあとといわず

(これは他人がいうんでしょうね、人と比較されることが
いかに子どもにとって傷つくかということです)

競争をしたこともなし一人っ子

ママのヒスみんな集まる一人っ子

(一人っ子の悲哀です)

十四年父の無能をふきこまれ ようやくわかった母のおろかさ
(笑い)

そしてこの本をまとめられた中学の先生は、親たちにとくとを、表題の下に、まず

「父は立て」と書いておられる。父はやっぱり、人生を生きていることを示せ、という意味でしょう。そして「母はすわれ」という。母は言葉をおしんで、故郷の山のようにすわって何も一日すわっていないくていいんです。仕事に行く母、勉強に行く母、けっこうなのです。それが、いかにも母親がその家庭に泰然としているイメージをいったわけです。そして「子はのびよ」とある。「父は立て母は坐れよ子は伸びよ」です。この本はまさに今日の少し意欲ある表現上手な子どもたちの訴えであります。

最後に一つだけ、ユーモアとは何ぞやということですが、非常に簡単にいえば、影があれば光があるという物の見方。余裕をもつて客観的に物を見る。そういうことです。これは大体、マン（男）の物です。女性は見面目ですから、そういうユーモアのある夫と一緒にいる間にだんだん成長してくる。女子学生も一年の時より四年になるとずっとユーモアを解するようになる、それはいろいろな物を見てはばが出てくるからです。

ですから、これから皆さん、最初学歴の園長たる皆さんにしたいだきたいことは、子どもたち、殊に男の子には、人の身

になって物を考える、明暗をよむ心、ただまじめの一筋じゃなくて余裕のある物の見方、そしてさりげない表現のできるような、そういう教育を今からしていただきたい。そうしますと今から読みます作文のようになると思います。東北の、それほど教育的とはいえない農村の家庭ですよ。すばらしいユーモラスな親子の出会いの姿です。「ごいつ」という題からしてユーモラスです。

正月休みの時に父は旅行に出た。父のおとうとの三重県に行った。私は前の晩、ポケットウイスキーを一二〇円で買って父にさし出した。父はうれしそうにサンキューといってケースに入れた。

（この表現がいいですね、東北の農村のおっちゃんやがサンキューというからいいんです。洋行帰りのパパがサンキューなんていっても、今の子どもはゲバしますよ。東北の農村の、とりわけ言葉少ないおっちゃんや、出がけに娘の心根をくんで横文字でサンキューといった。ユーモアとはそういうものなのです。その人らしい、たくまざる、マンネリではないものなんです）

父は「お土産買って来てやるから自分のほしい物は何でもい

え”といった。弟たちは“ジストル、刀”などといった。母も“セーター、セーター”などとまるで子どものようにいつていた。父がお前も何かときいた時私は何もいわないで、“お父さん元気で帰ってきてくれるのが何よりもお土産だ”といったら父は“こいつ！”といって頭をおした。

次の日の朝も父は、“本当にいらないか”ときき返したが、私は、“いらね”といったら苦笑いしていた。父は行ってしまった。実は私は、何か頼めばよかったなあとと思った。でも父は案外ふだんから小さい所によく気がつく人だから、多分何か買ってきてくれるだろうと思った。いよいよ父帰る日、私は胸をわくわくさせて迎えに行った。父は私の顔を見て、“何も買ってきて来ないぞ”と笑った。私は“チクショウ”といって笑った。そして父は笑いながらだまって包をさし出した。中味はかわいい人形だった。私は本当にうれしかった。そして父を尊敬した。

子どもが親を好きだといい、尊敬するといい、案外よくみているものだし、長いつきあい、ユーモアなふんいきの中でこそ、横顔、うしろ姿でこそということ、現代っ子が私どもに証明してくれているものです。

おわりに

最後に、大人の、子どもの声の理解の仕方ときいていい詩を、私の大好きな八木重吉の詩をご紹介します。

さて 赤ん坊はなぜあんなにあんあんあん泣くんだろう
本当にうるせえよあんあん あんあんあんあん あんあ
うるさかねえよ うるさかないよ

(よんでいるんだよ母さんを) よんでいるんだよ
神さまをよんでいるんだよ みんなも呼びな
あんなにしつこく呼びな

私が最後に申したいことは、いろいろよくばりたいことは、あれもこれもありません。それが、必死に求めれば与えないという願、願があります。それは、必死に求めれば与えられる。子どもはそれで生命を維持するために、ああいうけたましい泣き方をするんじゃないか。うるせえよと思わないでわれわれも、この価値観が混乱した世の中で、この点と点だけはくずさずに探求しているという物をきめる必要があります。

児童文学と子どものイメージ

— 観察研究による児童文学への接近 —



本 田 和 子

「目に見えるように描く」ということが、児童文学の必須条件の一つとされ、評価に際しての有力な基準となっている。

「目に見える具体性」を、児童文学の本質と考える傾向は、石井桃子・瀬田貞二・いぬいとみこらの同人で、「子どもと文学」という一冊の本にまとめられた児童文学論によって拍車をかけられている。その本の中で、いぬいとみこが分担した未明批判においても、未明作品の致命的な欠陥として、「登場人物や情景が目に見えるように描かれていない」ということが、くり返し指摘されるのである。

一例をあげれば、いぬいは、「赤いろうそくと人魚」に関して、次のように批判する。

——舞台装置になっている「ものすごい」ふん囲気だけはわかりますが、そこに登場してきた人魚については、あまりはつきりとその姿を思いうかべることができません。——
いぬいらは、比較対象としてアンデルセンの「人魚姫」を引

用する。アンデルセンの描く海は、心に映る気分としての海ではなく、リアリティのある深い海であり、読者の目の前に「はつきりと」「見えるように」姿を表わしてくるとされている。これに従えば、リアリティのある海の表わし方とは、次のようなものである。

——水は一ばん美しいヤグルマソウの花びらのように美しく、一ばんきれいな水晶のように澄んでいます。ところがその深いことといったら、どんなに長い、いかりづなでもとどかないくらい深く、教会の塔をいくつもいくつもつまかさねて、ようやく水の上までとどくほどです。——アンデルセン「人魚姫」より

これによれば、児童文学におけるリアリティとは、「目に見えるように描かれている」ことであり、目に見えるような描き方とは、「視覚的映像を成立させるための手がかりに満ちている」ことのようなのである。確かに、アンデルセンの例文は、視覚的映

像で充滿している。水の色も、水の深さも、その透明度も、すべて視覚的な比喩で説明されているのである。

石井・いぬいらのこの評論が、子どもの文学に関心を持つ人々に与えた影響は大きかった。特に、日本の児童文学に向けられた批判点、「子ども不在」と「目に見える具体性に欠ける」という指摘は、ほぼ異論なく肯定され、その後の児童文学を考える有力な基準とされている。

ところで、児童文学的リアリティとは、果して「目に見えるように描かれている」ことだろうか。子どもが、文学的虚構の世界でリアリティを感じるためには、必ず「目に見えるような描写」が必要なのか否か。子どもに触れ、子どもの「感じる世界」に近づく機会を持つたびに、このような疑問が頭をもたげてくる。子どもが、虚構の世界の存在にイメージにおいて出会うためには、必ずしも視覚的映像を成立させる必要はないのではないか。

◆ 子どもの感じる世界

観察研究でとらえられた幾つかの具体例を引こう。そして、それを手がかりとしながら、子どもの「感じる世界」について考えてみたいと思う。

例1——子どもが砂場で山を作っている。大きな山ができた。

保育者がそばで木片の汽車を走らせている。「ポー」「ガタンガタン」「シュッシュッシュッ」と言いながら、山の周囲を走らせる。子どもは、自分の作った山にトンネルを掘る。掘り終わると、パッとかけ出して、ブランコに行ってしまった。保育者は取り残されてちょっとあつ氣にとられたような表情。

子どもは、楽しそうにブランコをゆっくりとゆすりながら、「ガタンガタン」「ポー」と口ずさむ。

子どもが砂山を作ったのを見て、保育者はトンネルのイメージを抱かせようと、汽車ごっこを始めた。この働きかけは成功して、子どもはトンネルを掘り始めた。しかし、トンネルを掘り終えた子どもは、ブランコへとんでいつてしまった。トンネルに汽車を走らせて、砂遊びをより活発に展開させようとねらっていた保育者を、ちょっと呆然とさせる場面である。しかし、子どもの側では、まさに、汽車ごっこをしているのであった。

大きな山にトンネルを掘ったとき、子どもは確かに汽車を感じた。野をこえ、林を横切り、トンネルをくぐって走り続ける汽車を感じたのである。その汽車の動きの速度を「ガタンガタン」とゆれるその振動の感じを、体全体で感じたのである。そして、ブランコにとんでいった子どもは、この動きの感じを体全体で表現したのであった。

保育者にとって、汽車ごっこが続くことは、トンネルをくぐ

らせたり鉄橋を渡らせたりして、見える形としても、汽車を走らせて遊ぶことであつた。子どもにとっては必ずしもそうではない。ブランコで体をゆすることが、汽車の動きの感じを表現することであり、砂遊びと一連の汽車遊びなのであつた。

子どもをとらえていたのは「動きのイメージ」とでも名付けられるものであり、「リズムミカルに空中をゆれ動く快さ」であつた。汽車ごつこの楽しさとして、子どもが追いかけたのはこのようなものだったのである。

坪田譲治の作品の中に、住みなれた家を引きはらつて、祖父の家に移り住むことになつた子どもが、自分のおもちゃや道具をまとめる場面がある。柿の木の枝から、なわをつるしたブランコを、その子は大変愛しているが、柿の木まで持っていくわけにはいかない。そこで少年は、ブランコにつてユラユラと体をゆすり始める。つまり、ブランコの乗り心地を持っていたとしたのであつた。

子どもが、体全体でとらえ、表現しようとするこの「動きのイメージ」は、子どもにとってきわめて身近な、親しい「感じ」として、子どもの世界に位置づいているように思われる。

例2——子どもたちが砂場に大きな穴を掘り、水をたたえる。

一人の子どもが、ヤクルトのびんの底をぬいたものを持ってき

て、水に沈める。びんの口だけがポツカリ水面に出ている。保育者が「潜望鏡みたいね」と言う。(水面に頭だけ出したびんの口は、確かに潜望鏡のように見える)

子どもたちは、保育者の顔を見上げるが、そのまま、びんの口に水を注ぎ入れ始める。底がぬいてあるので、注いでも注いでも、じょうごのように流れていく。子どもたちは、時々、砂を注いだり、泥水にしたり、きれいな水にしたりしながら、「穴に注ぐ」という行為を続けている。——

保育者は、水の上にポカッと頭を出したびんの口を潜望鏡に見たてた。確かに、視覚像をきっかけとする想像の世界では、湖水に沈んだ潜水艦をイメージしてもおかしくはない情景であつた。しかし、子どもたちを魅し、誘い続けていたのは、ポツカリと口を開いた「穴」であつた。

口を開いた穴の前に立つとき、人は何を感じるのだろうか。「出雲風土記」にみられる次のような文章は、「人と穴の出会い」を、きわめて原型的な姿で示してくれる。

——窟の内に穴あり。人入ることを得ず、深き浅きを知らず。夢に此の磯の窟の辺に至れば必ず死ぬ。故、俗人、古より今に至るまで、黄泉の坂・黄泉の穴と号け言えり——「出雲国宇賀の郷」——

——佐太大神の生れましし所なり。御祖神魂命の御子、支佐

加地質命、闇き岩屋なるかも、と詔りたまひて、金弓以ちて射給ひし時に、光り加加明けり。故、加加と言ふ——「出雲国加賀の郷」——

古代の人々は、暗く開かれた穴の前に立った時、そこに「他界への入り口」を感じた。穴の向うには、「死者の住む黄泉の国」が開けていようし、また、「生まれ出る者たちの国」が光り輝いて存在してもいる。神々は穴を通路として現世に生まれ給い、死者もまた穴をたどって黄泉へ帰るのであった。佐太大神は「田の神（農耕神）」である。この神の誕生によって人の生活に農耕が導き入れられ、稲のみのりがもたらされた。生命を維持するための基本的な生産の神、これは人の生命の守り手でもあるのだが、この神は「暗き岩屋を輝かして」生まれ出たのである。

神話の世界は、人ともものが最も根源的なイメージにおいて出会う姿を、素朴に、しかし、きわめて象徴的に表現して見せてくれる。穴に関しても、人がいかに穴の前でそれと神秘を感じ、同時に、魅され、誘われたかを物語っているようである。穴は、人間にとって、見える世界（知覚によってとらえられる現実）と、見えない世界（未知の領域・想像空間・無意識の世界など）とを、つなぐ通路であり、時には、見えない世界そのものの性格も持つ。未知に向かって開かれた穴のゆえに、人

はその前で恐れを感じ、同時に、中へわけ入りたい誘惑にとらえられるのであろう。穴の向うに広がるのは限りない未知であるために、あらゆるものを包みこみこむことも可能であるし、同時に、そこから新たなものが生まれ出ることも期待し得るのである。

子どもの前にポッカリ口を開いた穴に向かって、「指を入れてみる・ものを注ぎこむ・自分から入ってみる」など、さまざまに試みる姿は、子どもと見えない世界とのひそやかな応答なのではないだろうか。

水面から頭だけのぞかせたびんの口に対して、子どもは、潜水艦も潜望鏡も感じなかった。潜水艦というような視覚的類似性を排して、子どもが感じたのはもっと単純でもっと根源的な、「穴」のおもしろさであった。

◆ 児童文学のイメージ

私どもが「イメージを抱く」という場合は、往々にして、そのものの視覚的映像を、そのもののないところに成立させることを指している。イメージとは、視覚的映像と同義語であるかのように、とらえられがちな現状がある。しかし、イメージとは視覚像に限らないし、子どもの場合には、視覚像が成立する場合はそれほど多くないと言え、言えそうである。子どもの世

界を満たしているのは「動きの感じ」であつたり、「自分自身を基調とした空間感覚」であつたり、あるいは、見えも聞こえもしないが確かに感じられる「存在感」だつたりするのである。

文学の世界は、たとえそれがファンタスティックなものであれ、あるいはリアリティックなものであつたにせよ、いずれも虚構の世界であるから、読者と文学とのかわりは、「虚なる世界においてイメージと出会うこと」つまり想像状況における関係ということになるであらう。想像作用を、一応「像的意識」ととらえておこう。現実には眼の前にはないものを思つて、それを存在させる意識の働きである。この、ないものを存在させるという作用に対して、「姿を現わす」という意味をもつギリシャ語のファインैन (phainein) から転じたファンタスマ (phantasma) が当てられた。

このファインैनという語が、「姿を現わす・見える」という意味を持つていたことから、想像するという行為が、視覚像を成立させることのようにとらえられがちであつた。さらに、先の例のように、私たち大人が「イメージを持つ」場合、視覚に成立する物的イメージを手がかりにすることが多いため、いつか、虚構の世界を把握するには、そこにはないものを視覚像として成立させねばならないとする狭い考え方が支配的となつたのではないだろうか。

子どものイメージの世界の中で、視覚像の占める割合はそれほど大きくない。むしろ、運動感覚や空間感覚、触覚や味覚などの感覚に対応するような、さらには存在感覚とでもいうような総合的な実在感があり、それに対応するような「像的意識」が働いているのが子どもの世界かもしれないのである。

したがつて、児童文学を契機として作り出される虚構の世界が、必ずしも言葉どおりの意味で「目に見えてくる」必要はないのではないかと思われる。あるいは「目に見える」という言葉が使われたとして、それは、そこにはないものを存在させる（現前化）という意味に解すべきであつて、必ずしも視覚的に見えてくることだけを意味しないのではないか。

子どものグルーブと、劇あそびの相談をしていたとき、次のような例にぶつかった。「三匹の山羊のガラガラどん」を題材にして、登場人物の相談をしていた。大人の指導者は、当然「三匹の山羊とトロル」を考えた。ところが、子どもの中から「橋」とか「谷川」、果ては「村」というのまで出てきて、指導者を驚かせた。「橋」や「谷川」はまだわかるが、「村」とは、完全に大人の予想を裏切つた発想である。「村」とは、人間が便宜的に構成した生活集団のある単位であり、それに冠された抽象的な名称にすぎない。しかし、子どもにとっては、それが確かな存在感をもつてとらえられていた。すなわち、ガラガラどん

の生活しているところ、その生活の根拠となつてゐる実在として把握されている。「村」と言われて驚いた指導者は、劇の中で人間がどうやって「村」を演じるのか、想像もできなかった。

大人に思いつくのは、せいぜい、背景に村の絵を描く位である。しかし、子どもは「ある確かな存在感」を、一人の人間を登場させることによって表現し得ると考えたのであろう。

「村になった人は、どうやって演技をするのか」という大人の問いに対して、「村になつて出ていけばいい」という答えが返つてきている。

「村」とか「海」、あるいは「水」や「土」などについて、子どものわかる「わかり方」には一種独特のものがあるようである。大人が口にする「青い青いエメラルドのような海」という言葉は、子どもに必ずしも「青い海」の視覚的映像を成立させるとは限らず、「青い」も「エメラルドのような」も単なる音にしかすぎないことがある。

「海」とは、間断なくよせては返す波のうねりであり、砂浜に築いた砂山が次々とくずされ、築くとまたくずされる、そのくり返しの感覚でとらえられる。波にさらわれたゴムボールが、返す波にのつて近よつてき、引く波によつて遠ざかり、現われ、遠のき、現われ、遠のいて、ついには見えなくなつてしまふあの不思議さ。出現させ、埋没させる、その両面をそなえたものの、

生み出し、のみつくす、この永却のくり返し、これが「海」の根源的なイメージとして子どもの体全体でとらえられるのではないか。

古代の人々、特に私どもの祖先は、海を「母のイメージ」においてとらえ、同時に、人間の魂の帰りつくところ、「常世の相」においてとらえた。海は「根の国」であり、また「は根の国」でもあった。「母のくに」は生み出すものであり、「根の国」はのみつくすものである。子どもたちの感じる世界は、これらの古代人の感覚に通じるものがあるようである。

子どもに向けて、「矢車草のように青い海」と説明せねばならない根拠が、どのくらいあるというのだろうか。「子どもと文学」において、いぬいとみこらが絶賛したアンデルセンの海の描写が、子どもが想像の世界において海と出会うのに、不可欠の条件をそなえているとは思えない。「矢車草の青」「水晶の透明度」あるいは「教会の塔をつみ重ねた深さ」というような、視覚像に訴えた比喩的表現の連なり、これも一つの手法にはちがいないが、これがすべてとは言ひ難いであろう。

「イメージの確かさ」とは、必ずしも、視覚像を成立させることではなく、子どもが真の存在感をもつてそのものの実在を感じとれることである。そのような存在感を感じさせることばであれば、表現方法としては一つの単語だけでも充分であらう。

子どもの体全体を、快い運動感覚で包むようなリズムミカルな文章であれば、それが存在感の源泉になる場合もあるといえよう。逆説めいた言い方であるが、色や形が明らかにされていないことによって、むしろ、実在感が確かになり、結果として「目に見えるように感じられてくる」ことすらあるのである。

宮沢賢治は擬音の使い方の巧みな作家といわれる。確かに、彼の作品では「稲こき機械がノンノンと動き」きのこは、どってこってこと楽隊を続けて「いる。「山猫はにゃあとした顔」をして「いるし、狩人は「ニカニカと笑う」のである。これらのことばの効果、すなわち、「どってこってこ」という音の響きは、私どもの周囲に、白や茶色や、その他さまざまの名前のつけられないような色や形をもったきのこの大群を出現させる。「ニカニカ」という音で、煙草のやにで黄色く染まったような函をもった、中年の山の男が立ち現われてくるのである。

これは「目に見えて」いるのだろうか。確かに、私たちは、「にゃあとした顔の山猫」と出会うし、「のろったとした淵」の水をのぞき込むことができる。しかし、山猫の顔や狩人の姿を絵に描くことは、できそうできにくいのではないか。あるいは、描いてみれば各人各様、各々にちがう絵として自分の出会っているものを表現するだろう。作品の中には、絵そのものの、視覚的な映像そのものは呈示されていないのである。

子どもにとって、「感じられる世界」があり、子どもはそれを感じる「感受性」を持っている。まずそれを肯定し、受け入れ、それに近づくことが大切である。それによって、児童文学の創作に関しても、あるいは評価に関しても、より新しい視点が開けてくるのではないか。

児童文学は「目に見える具体性」をもたねばならず、「子どもにわからねばならない」とされてきた。それが、子どもの文学の第一の条件というのである。しかし、「目に見えるような存在感」とは、子どもにとってどのようなものなのか、「わかる」ということはどのようなことであり、子どもはどのような「わかり方」が可能なのだろうか。私どもは、表面的・常識的な解釈をこえねばならない。そして、子どもの世界に即して、子どもの側からもう一度、とらえ直すことを試みねばならないのである。

(お茶の水女子大学)

「釜ヶ崎家庭保育の家」を

おたずねして



新大阪から地下鉄に乗って、動物園前で下車、地上に出る。ケバケバしい装飾のあるパチンコやの前だった。周郷先生は「くさいね」とポツンとおっしゃった。私は、釜ヶ崎家庭保育の家からいただいた葉書の地図を見た。ちょうどその地図の飛田商店街（もとは遊郭だったとか）と国道をへだてた向かい側に私たちは立っていた。

「この辺でちょっと考えをまとめて、電話をしてから行こう」といわれる先生について「喫茶、日本一」という店に入った。東京の喫茶店につきもののピンクの電話はいくら見回しても見えなかった。店の中には子どもづれのおかみさんふうな人とか、昼からアルコールの入っているような中年の男の人とか、ちょっと喫茶店というイメージとは遠い店で、おそろおそろ「公衆電話はありますか」とたずねた。「あそこのパチンコやの前です」といわれて外へ出る。国道の騒音を背にダイヤルをまわすと「ハイ、釜ヶ崎家庭保育の家です」と若い声、「これからうかがいます。道はわかります」と電話を切って歩き始めた。一応アーケード風な商店街、浅草の新仲見世の道幅を狭くしたような感じだった。

「パチンコ、ニュー大阪」という店の角を、地図の通りに左に折れて、最初の四つ角を左に折れるとすぐに薬局があったので、右に折れた。でも道というより小路といった感じで○ホテ

ルとかそんなぐいの看板の家が並んでいる。「本当にここかしら」と歩いている内に道のはずれにきてしまった。やはりここらしいと、また戻って行き会った小母さんにたずねると、何とその○ホテルの隣りだった。

玄関をあけると、元気のいい若い保母さんの声につづいて「さあどうぞ 先生どうぞ」とストロームさんの声がして、私たちはこたつのまわりに案内された。ちょうどお昼寝の時間らしく、ストープであたためられた二十畳ぐらいの部屋には、下着姿の子どもたちが真赤なほほをして眠っていた。一人だけ靴を大事そうに両手にもって、キョトンと起きている子どもがいて、一月から入った新しい子どもだと説明してくださった。

「先生のお名前は？」ときかれるストロームさんに先生が名刺をお出しになると「しゅう？」と読まれる。先生は急いでローマ字で「すごうひろし」と書かれると「あ、珍しいお名前ですわね」、こうしてポツリポツリと先生とエリザベス・ストロームさんの対話が始まった。(かっこの中は保母さんたち)

* * *

S 私は、六年くらい前にテレビで始めてストロームさんのことを見ました。その時最後に雪の中をストロームさんが詩を、自分で作った詩を口ずさみながら歩いているのが、非常に感動的で、その時からずいとお会いたいと思っていました。

E 雪？ 私はそのテレビ見てません。でも釜ヶ崎には雪ありません。ドイツかもしれませんねー笑いー

* * *

S 動物園前で地下鉄をおりましたらね、何か臭いでしょ？

(アルコールとおしっこ……)

E 便所、ないですから……。

S ああ、ないんですか、

(いいえ、三カ所ぐらいあるんですけど、みんなその路地とか、どぶでしちゃうんです。夜なんかもっとひどいです)

E 私にはわかりません。

(もうしみこんでるんですよー笑いー)

S それで考えましたけどね。ストロームさんが、こんな臭いのする釜ヶ崎へ来て十年、こういうことをやらないではおれなかった、それはどういう心でしょうか、日本人にわかるでしょうか？

E そこについては私、考えてないんです。考えたら返事にならないから……。

なんか、この間、あるカトリックのシスターが見えてインタビューなさいました。それで、ほんと、新聞社と同じ質問なさるのね。まず第一に、釜ヶ崎へ来た動機は何ですか？ 同じクエッションです。なんであなたは釜ヶ崎へ来なかつ

たのですか？”……

* * *

S 私は、日本で一番古い幼稚園の園長を四年間やってきました。そして園長をしながら、日本の将来はますます暗くなるような気がしてきました。それでずっとあこがれていたストロームさんに会いたいと思いました。お会いするということがだけで解決できるとは思いませんが……。

日本の人は、ストロームさんがやわないではいられないでして、いられることを、なぜか、“外人だから”“外人はああいうふうを考えるものだ、日本人とは違うんだ”というふうにいつて、うまく逃げているような気がするんですが……。

E そうそう、そういうふうによくいわれますね。

* * *

S ぼくのやりきれない気持ち、日本人でありながら日本人を見ていると気味が悪い、こういうことをぼくの外人の友人に話すとかえっておかしいといわれます。

E 日本の人が気味が悪い？

S ええ、私としては日本人があまり何も考えないことです。自分も空気をよごしているし、ごみも出しているのに、そういうことをあんまり感じていませんね。

E 感じていないんでしょうかしら……そう……感じてないん

でしようね。

S 人が困ってても、共感、シンパシーというものを感じなくなりしました。大人もそうですけど子どももそうなんです。涙も出なくなりました。

E それは最近のことですか？

S ええ最近、もう数年前から……。そして今、ますますそうなんです。もとは、敗戦の前は、人が困ってると涙が出ましたよ。

E そして、何かやろうという意識がありましたか？

S ええ、ですが戦争に負けて、朝鮮戦争のあと経済成長して、そういうセンス、フィーリングがなくなっちゃいました。小さい子どもも。大人がそうですから、感情の動きを教わる機会がない。

E いや、私の見方では、今、私の目で見ている日本の社会はですね、人の困ることを、見るは見てるんですけど、それは仕方がない、という心がすぐあるんじゃないか、それが私が見ている日本人の態度です。

何でもかんでも仕方がない、何でもかんでも面倒くさいとほっておく、あきらめる、そういう性格、というほどはいいたくないんです、クセですかしら。

S クセ、習慣、でしょうね。

E そのクセは、最近出てきましたかしら。先生のおっしゃる通りだと、昔からじゃないんですね。

S 昔からあるにはありました。でも今ほどではないと思います。日本独特の短歌とか俳句に見られるように、人の悲しみもわかりましたし、自然の美しさをわかるという気持ちはありました。

E 自然はなくなりましたね。

S そう。それから都市に住むようになりましたね、人の悲しみなんかわかってたら都市では生きちゃおれない。子どもも大人も何でも面倒くさいんです。

* * *

E 私の立場から見ると、個人じゃなくて、社会福祉の立場からみると、私の国と日本、私の社会と日本の社会、私の国の歴史と日本の歴史、これをくらべることは本当は無理なんですけれど、もしくらべたならば、私の国の方は福祉事業の歴史が長い、古いでしょう。

E こちらは、国立でも私立でも福祉事業の歴史がない。といったらいすぎですが、ほとんどないですね。

S ほとんどない、そう思います。

E 一人だけがどこかでやっても、一生懸命やっても歴史にならないです。向こうは、一人でやったり、グループでやったり

ります。するとそのグループは何かよい影響を及ぼす、政治に対しても力をもってきます。もちろん民生もついてくる、どうしても歴史になるんです。こちらは、個人個人の活動はあっても民生の活動にならない、だから国の社会福祉事業が弱い。それはどういうわけでしょうか。

S ぼくは、今ストロームさんがいわれたことは、始めて聞いたような、フレッシュな感じがあります。歴史にならないという……。日本では、そういう人が何人かいても、お役人も国民もケチをつけてこわしてしまおう。

E その通り、その通りです。

* * *

S ストロームさんが以前、ハイマートとは何をいうかと「生きがいのある仕事があつて、愛する人がいて信頼され愛されていれば、そこそハイマート」といわれたのを読んで、非常に感動しましたが、歴史にならないと今いわれたこと、多少関係がありますね。

E 日本人はハイマートがないんです。生れ故郷はこわされ、都会に来ればみんな孤立して隣りとも関係ない、誰も愛さないし愛されもしない、だからハイマートがないです。

E それはちょうど工業革命と一緒に、そういうことがおこりました。西洋にも同じ経験があつたと思います。

しかし日本の場合、もし私が西成区で生まれた、となれば西成は私の家となり、本籍もこちら、私が北海道へ行っても九州へ行っても盆やお正月には家に帰ります。だから都会へ行っても家から完全に切れない、都会へ行っても友だち作る必要がないんです。

S ええ、日本はそうですね。

E 根はここに残ってます。それは西洋と違います。私はこちらで生まれても、もしこの大阪から名古屋とか東京へ行く時は、ここを切るんです、何も残しません。パスポートには生まれた場所を書いてあります、でもそれだけのことです。どうしてもハイマートを作らなければならないんです。

「家」という考え方じゃなくて、「私」という考え方深いです。

* * *

E 日本の人は戦争が終わって、ヨーロッパを見てびっくりしました。そしてそれを取り戻すのに一生懸命になって、今度はあるところは学び、あるところはちょっと上へ出てきて外国からいろいろなわかれてます。西洋の真似して、見たり、うけいれたり、〃仕方がない、かまいません〃といいながらここまでできました。今度は、いらないものを捨てるのじゃないですか。その時が必ずくると思います。

S ただ、日本人にそういう選択能力があるでしょうか。

E あります。でもまだその時期はきていません。今はまだ西洋を真似して同じことを競争してやりたい、そうしないと心配だという気持ちがあります。しかし、私の目で見ると、その心配は必要ないと思うんです。ですけど、日本人自身はまだわかっていないと思います。

S 私もそう思いますけど、あまりにも外国と競争し、はり合う気持ちが強すぎます。

E はい、そうですね。しかしある程度までは競争も、自分の存在のために必要でいいと思います。で、しばらくは西洋が負けた、よう、でした。それで今は、西洋が立ちあがったというのが今の状態です。

これから日本は、日本の昔の精神を思い出したらば、今までの武術的な競争と共に、日本のスピリット、霊が入ったならば、西洋はまけるのじゃないかと思えます。これからが西洋と東洋があうことになります。

S 私はちょっと、そのところがわからないが、競争じゃなくて、友人になるという状態にはどうしたになれるでしょうか。

E 友だちになったらいいですけど、具体的にどうなるんでしょう。ちょっとわかりません。

* * *

S ストロームさんは、昔から日本にあったスピリット、靈を価値あるものと思いませんか？

E はい、思います。

S ぼくは日本人だからわかりませんが、西洋人や中国人のもつてきた精神は、もつとスケールの大きいものじゃないかと思うんですが……。

E そう、西洋のもつてるもの、東洋のもつてるもの、もち方が違うと思います。

西洋のもつてるものはステイッシュ、テオレティッシュです。そしてこちらは、どうでもいい、仕方ないといいながら、何かアクティブのような気がします。向うは、完全じゃなきゃ断わるんです。殊に私の苦勞するのは神学の言葉です。完全に、完結しなきゃいけないんです。

S 中国はどうですか？ ぼくは、中国はキリスト教の力をかりずに、キリスト教的改革をしたように思いますが……。

E 中国のことはわかりませんが、大したことをしたと思いませんね。

* * *

E 日本人は、西洋人に会うと二つの心がありますね。一つは、西洋人を尊敬し、ごていねいにする。そして同時に、一つは

あのへんな外人という気持ちがあるじゃないですか？ — 笑い —

それから、日本の人は、美しいものときたないもの、美しいとそうでない、非常にはっきり区別しますね。これは何か宗教的なものではないですか？ 客間、応接間、きれいにしますね。台所はきたなくても……。

S そうですね、神道の、汚れをいみきらう、それでそうかもしません。

E そうでしょう？ そこに差別観、釜ヶ崎はきたない、部落はきたないという考えが出てくるんじゃないですか。

S 政治にもそういう面がありますね。公害、きたないもの、それはどこかへおしやればいい、見えなければいい、という……。

E きたない、だから直しましょう、きれいにしましょうという気持ちがないです。

昔のことはよくしりませんが、大阪城のまわりには何か、大阪城の関係の人しか住んでなかったんじゃないかと思えます。現在も環状線の中、東区、南区とか、本町と心斎橋のあの辺までは、会社、銀行、問屋さんばかり、その外側はドーナツ形に、全部問題地域です。区別されています。これはやはり宗教的な何かあると思います。日本ではキリスト教でさ

え、「日本教」になっています。

S 本場にそうですね、こういうことはちょっと考えて見ませんでした、宗教的なもの……ね。

この対話は、お昼寝からさめた子どもたちの中で、ストロームさんは子どもたちに心をくばりながら、先生も時折、子どもたちの相手をされながら、二時間あまりの時間、続けられました。チョコチョコときて先生の頭をポンとたたいて行った子ども、私のひぎに、しらない間にのってきた子ども、お昼寝からさめきれないままに、畳の上にウンチをしてしまった子ども、にぎやかなその中で熱心に話し合いました。

先生が大学でフィロソフィのプロフェッサーをしているとおっしゃるとストロームさんは「その大学の卒業生は、どういう所に就職しますか？ 一人保母さんがやるので」とすぐおっしゃった。先生は「こういう所へきて手伝えば、学問するよりもよほどいい」と、帰ったら感動をこめて学生にこの話をしましょう」と別れ際に固い握手をされた。「私もここへ来たい」という私には「あんたは年ととりすぎて」とつれなくおっしゃったのに……。

ほんの短い時間で、ストロームさんのお仕事をのぞいたにすぎないが、先生はおそらくもっとと深くお入りになれたに

違いない。それにしてもしみじみと考えたことは、

「私は今まで何をしてきたのだろうか、そして、これから何ができるのだろうか」ということだった。

(二月五日赤間記)

エリザベス・ストロームさんのこと

一九二二年二月二日 南ドイツ、ヴェルテンベルク州、フリーラインハイム村に生まれる。

聖書学院卒業。父親は施設で刑余者の面倒を見ていた。

一九五三年十一月十五日、ルーテル教会宣教師として来日。

一九六四年秋から、大阪市西成区の「あいりん地区」釜ヶ崎で乳幼児の保育活動をつづけている。その間、大阪府立社会事業短期大学で学ぶ。

著書 「釜ヶ崎はワタシの故郷」 教文館発行

日本保育学会第二十六回大会のお知らせ

会期 昭和四十八年五月十九日(土) 二十日(日)

会場 大妻女子大学

内容 研究発表・講演・シンポジウム他

連絡先 東京都千代田区三番町十二 (261) 九八四一

子どもの生きがい

生きがいとは、辞書によると、「生きていくだけの効力、生きている幸福、利益、生きていることに意義、喜びを見いだして感じる心のほりあい」などである。

大人が「あなたの生きがいはなんですか」と問われた時、ある人は「子どもが生きがいです」と答え、ある人は「仕事に生きがいを感じます」というような答え方をする。このように、生きがいという言葉は二通りに解釈されている。つまり、前者は生きがいの対象、生きがいを生み出す源となるものを意味し、後者は行為そのものの中によるこびを感じた時、あるいはその仕事に使命感を感じ、自分を必要としているのだという意識を持った時など、生きがいを感じている精神状態を意味している。生きがいを感ずる心は、



北岡 順子

いろいろの要素が入り混ざっていると考えられるが、一番素朴な形は、いきいきとしたよろこびを心の底から感ずることであろう。

「ある人に真のよろこびをもたらすものこそ、そのひとの生きがいとなりうるものである」といえる⁽¹⁾。それでは、子どもにとっての生きがいは一体何であろうか。子どもを産み育てる母親が、子どもを生きがいだと断言するような、強い生きがいの対象、源は少ないと思われる。子どもが生活の中で感じるいきいきとしたよろこびが、生きがいをもたらすものと言えるだろう。ここでは、このような生きがい感について、三人の子どもたちの生活の中からさぐってみたいと思う。

★K子（二歳五ヵ月）

生活の中心は、姉と遊ぶこと、絵本を見ること、テレビを見ること、などである。絵本の中に自分の知っている事物を認めてはよろこび、絵を見ながら、読んでもらった話を思い出したり、自分で話を作ったりして、一人で話しながら楽しんでる。テレビを見ている時には、次にはどのような場面が展開されるかをすでに知っていて、その予測が当たると一段とよろこぶ。特に、毎日見ている幼児向けの番組とか、何度も何度もくり返し放映されるコマーションなどでは、「ほらほら、みてて、あのころぶから」と大人に前もって知らせ、その予測通りになると得意げによるこびを表現している。

また姉と一緒にすることをして遊びたがる。R子が絵を描き出すと自分も描きたがる。今は、なぐり描きの段階から図式画の段階へ移行しつつある状態で、一人で訳のわからないものを描きながら、「これワンワン。まる、さんかく」と名づけながらよろこんで描いている。お人形ごっこなども、まだ一緒に協力して行なうことはできず、姉と一緒にすることをしていて満足している。

一番上の姉のT子が加わると状況が少し変化してくる。

T子が、「K子ちゃん、このかごを持っておつかいに行ってきたらどうだい」とか「ここは赤ちゃんの寝るところなの。一緒にねんねしてあげて」など、K子が仲間にはいれるようなきそいかけ、指示を行なうので、それらに従うことによって、仲間に入れてもらったと感じ、よろこんで遊んでいる。

また、自分の知っている童謡、コマーションソングなどを家族の者に歌って聞かせ、周囲の大人がほめると得意になり、さらにはふざけた調子で何度も何度もくり返し歌ってはよろこんでいる。その他、今までできなかったことができるようになった時、たとえばテレビの上に手が届くようになったとか、積木で家らしきものが積めたとか、やっと思所で排せつを行なえるようになったとか、このような場合「ほらできた、みんな見て」と家族の者に示したり、自分で、「ようやる」など一人ごとを言ったりしてよろこびを表わしている。

★R子（四歳九ヵ月）

姉のT子が幼稚園へ行っている午前中はとてもおとなし

い。一人で絵を描いたり、絵本を見たりして、ただ黙々と遊んでいる。お人形ごっこなどをして、新しい発展もなくすぐとぎれてしまう。K子と二人ではうまく遊べず、K子は遊びを邪魔する存在としてとらえられている方が多い。「私のお人形をさわった」とか、「せっかく描いた絵にいたずらをした」とか、すぐにけんかになってしまう。

T子が帰宅するとたんに元気になる。姉と同じことをしたい、姉のようにになりたいという欲求が非常に強く感じられている。したがって、姉と一緒に遊ぶこと自体が大きなるこびで、何でも一緒のことをしたがる。T子が自転車に乗ると言えば自分も自転車に乗るし、お人形ごっこをしようと言えばお人形ごっこをするし、絵本をみよう、絵を描こう、レコードを聞こうと言えば、すべてそのとおりのことをする。姉が友だちの所へ遊びに行くと言えば、一緒にについて行きたがるし、姉とおそろいの服を着ることを好む。

このように生活のすべてにおいて、自分の欲求よりも「お姉ちゃんはどうするの?」と、姉のすることの方が大きな比重を占めて考えられている。したがって、この欲求がすべての生活を支配しているので、「お姉ちゃんのように

になる」という目標に到達できたと自分で認識した時、強いよろこびを感じている。このことが最もはっきりと現われるのは、絵を描いている時である。姉と一緒に絵を描いていると、どちらが上手に描けたかにこだわる。R子なりにいつもより上手に描けていても、自分で姉より劣っていると判断すると怒りを感じ、せっかく描いたものをくしゃくしゃにしてしまったり、破ってすてたりしてしまう。このような強い対抗意識を持ちながら絵を描くので、近ごろは、姉の描いたものと区別がつかないくらいの腕前となった。描く対象はもっぱら「女の子」で、「こんどはどんな髪型の子にしようか、洋服は長いドレスにしようか、短いスカートがいいかしら、くつはどんなのにしようか」と一つずつ楽しみながら描いている。

また、文字に対して興味を示しはじめ、お正月には姉と一緒にカルタとりをしたり、絵本の文字を拾い読みしたり、描いた絵に自分の名まえを書いたりしている。文字を読んだり、書いたりできるようになったことも、姉の位置に一步近づいたこととして受けとめられ、非常によろこびを感じている。

★T子（六歳八ヵ月）

もっぱら幼稚園での生活が重大関心事であるらしい。帰宅しての第一声が、

「今日、幼稚園で給食たべるの、だれが一番早かったと思う？」にはじまって、

「走るのが一番早いのはY君」

「なわとびが一番上手なのはHちゃん」

「本を一番上手に読むのはSちゃん」

「折紙を一番上手に折るのはYちゃん」

はては、

「お家ごっこをする時、赤ちゃんの泣き方の一番上手なのはAちゃん」

などと、次から次へとび出して来る。このように、すべての事柄が競争の対象となり、一番になることによって集団の中で認められたと感じ、それがよろこびとなって、帰宅早々の報告となるのであろう。

家庭では妹たちのリーダーとして遊んでいる。妹たちに役割を指示したり、場所、方法などをこまかく指示したりしながら、遊びが発展するように工夫をこらし、心くばり

を示している。このような時には、妹をかばいながら遊ぶことによりこびを感じている。

また絵本を読むことにも興味を示し、妹たちに読んで聞かせたり、一人で黙読したりしている。「チビクロサンボ」（これは幼稚園で劇あそびを行なってから特に好まれるようになった）や「ふしぎの国のアリス」などの絵物語は、文字を追って読むのが精いっぱいのようなものであるが、一生懸命がんばって、一冊を読み通したことにほこりを感じている。

あるいは、オルガン教室で習う練習曲をたどたくしく練習し始め、時には叱られながらも、ともかく自分のものとし、一応弾けるようになった時、「われながらよくやった」といった気持ちになり、ほのぼのとしたよろこびを感じている。そのほか、お姉さんぶった行動、たとえば、泣いているK子をあやかすとか、だっこするとか、あるいは、おつかいに行くなど、このような行動を行なう時にもよろこびを感じ、生き生きと活動している。

以上のように、子どもが生活の中で感じたよろこびが生きがいつながっていくものである。

「ウォーコップによれば、人間の活動のなかで、真のよろこびをもたらすものは目的、効用、必要、理由などと関係のない「それ自らのための活動」であるという」(2)

たしかに、何かを目的として行なう活動よりもやりたくてやる活動の方が真のよろこびをもたらすであろう。したがって、子どもにとっては、「遊び」に没頭している時に感じるよろこびが真のよろこびであり、それが生きがいにつながるっていく。それでは遊びの中でよろこびが感じられるのはいかなる時であろうか。いままでできなかったことができるようになった時、あるいは、知らなかったことが理解できた時、このような時に子どもは自分自身が成長した感じを受けとめ、強いよろこびを感じ、生きがい感を持つ。

幼い乳児の段階では、遊びに限定せず、生活そのものの中からよろこびを感じている。きげんのいい時に一人で微笑するとか、手足をバタバタさせてよろこぶとか、これらは純粹に全く生きていること自体によるこびを感じているかのである。しかし、子どもに感じられるよろこびの強さはそれほど強くないかもしれない。あるいは、母親の顔を認めると笑声をあげるとか、「いないいないばあ」に

よろこんで反応するとか、これらは知っている人を認めたよろこび、次に起こることへの期待に対するよろこびで、より強いよろこびとして感じられているだろう。さらには、積木が二つ積めたとか、スプーンで食物を口に運べたとか、今までできなかったことができるようになった時、よろこびが一段と強い感じで受けとめられる。これらの状態では、何度も何度もくり返して試みるという努力（子どもには努力として受けとめられていないかもしれない）が存在しているゆえに、到達した時点におけるよろこびはより強く感じられる。年齢が大きくなるにしたがって、結果に限らず、目標に到達しようと努力している過程に生きがいを感じるようになる。したがって、「できてよかった」という結果のよろこびだけにとどまらず、一生懸命打ち込んでいる感じ、何かに向かって前進している感じが生きがいの重要な面になっている。また、結果の判定は客観的におしはかれるものではない。自分自身で「できた」と感じられるものでなければならぬ。さらには、その結果を母親に認めてもらうとか、幼稚園の友だちに認めてもらうことによって、一そうできたよろこびが強められ、それだけ生きがい感を持つ。

また、子どもはいつも生活の中で、自分自身をより成長させたい、早く大きくなりたいという欲求を持ちつづけている。「お姉ちゃんのようにになりたい」という欲求が、生活のすべてを支配しているかのようにみえる。したがって、一つの事柄が「お姉ちゃんのようにできた」というよろこびだけでなく、お姉ちゃんと一緒に遊んでもらった経験（たとえ遊びの中での妹の役割が一人前として認められていなくても）を持つことは、自分自身の成長が認められた気持ちを持たせ、よろこびを感じさせる。一方姉の方は、姉としての存在意義を認められた時、たとえば、おつかいを頼まれたとか、妹のお守りを頼まれた時など、「もう大きくなったからお手伝いができるんだ、自分も役に立っているんだ」という気持ち、その時に感じる得意げな感情も生きがい感としてとらえられる。この生きがい感、大人が職業における使命感を生きがい感を感じる感情につながっていくものであろう。

以上のように、子どもが生きがいを感じる状態は、
・自分の好きな遊びの中で、新しい発見をしたり、努力して成就感を感じた時

・生活全般の中で、自分自身を成長させたい欲求が満たされた時

などである。したがって、子どもが生きがい感を持つような生活を営むためには、周囲の大人の子どもに対する接し方が問題となってくる。まず、子どもたちがのびのびと遊べる場と機会を多く確保することが望ましい。大人の一方的な都合で、何らかの制限が加えられたり、禁止されたりすることがないようにされなければならない。さらには、遊びの中や生活の中で子どもが感じたよろこびを卒直に受け入れ、心から共によろこび、はげましていく態度が望ましい。そうすることによって、子どものよろこびは一そう強化され、強い生きがい感を持つようになる。

成長するにつれて、生活の範囲が家庭内にとどまらず、幼稚園などの集団生活へと広がって行くと、クラスの仲間にも認められるということが大きなよろこびとなり生きがい感となる。この場合、その集団での価値判断が大きく関係してくる。つまり、どのような子どもがいい子として認められているかということである。友だちと仲良く協力して遊べるということが奨励されているような集団では、子どもたちはおのずからそれぞれの友だちの長所を遊びの中で

認め、共によるこび合い、はげまし合って生活していくであらう。その反対に、一斉に技能的なことのみ上達するように訓練させる集団では、ただその能力の上手、下手が評価の対象となり、それぞれの子どもの持っている長所が発揮されない。このような場合には、成就感によるよるこびも、仲間に認められるよるこびも、非常に少なくなってしまう。もちろん強い生きがい感を持つこともないまま、満たされない生活を送ることになる。このような事態に陥らないようにするには、保育者が正しい幼児観を持ち個々の子どもの活動が尊重され、仲間どうし助け合っているよるような保育を行なうことが望まれる。保育者のあり方によって、子どもの集団のあり方、ふん囲気も規制されてくるものである。

次に、子どもの自分自身を成長させたい、大きくなりたいという欲求は、身近の年長者がその目標としてとらえられている。妹は姉のようになることを目標とし、姉は友だちのようになることを目標とし、さらには母親のようになること（まだ幼児の段階では、母親の役割を部分的に果たすことにとどまっているが）を目標として生活を営んでいる。すでに幼児の時期から、生きる目標を母親において生

活しているのであるから、母親の生き方、考え方、生きがいの感じ方が、知らず知らずのうちに子どもの生き方、生きがいの感じ方に、重大な影響を与えることになる。

「母親は幼児教育など考えるな。その前に、自分自身が生きがいを求めて努力しなさい」（武蔵野市、西久保保育園近藤薫樹園長）(3)

という警告は、子どもに対する母親の根本的なあり方を示すものとして耳を傾ける必要がある。（松阪女子短期大学）

引用文献

- (1)、(2) 神谷恵美子著「生きがいについて」みすず書房
- (3) 中日新聞 昭和四十七年十二月二十八日

みどり会主催 幼児教育研修会のお知らせ

日 昭和四十八年八月二十日（水）二十二日（金）二泊三日

所 栃木県鬼怒川温泉 水明館

費用 参加費 一五〇〇円

宿泊費ほか（二泊六食 六〇〇〇円 計七五〇〇円）

室員 二五〇名（定員になり次第メ切らせていただきます）

分科会 第一 同郷博先生 第二 津守貞先生 第三 本

田和子先生 第四 外山滋比古先生 第五 小林つやえ

先生

申込み方法は67ページ

「幼児教育の源流」Ⅳ

ディーステルヴェークの幼児教育論



生 馬 寛 信

はじめに

十九世紀中葉のドイツにおいて活躍した教育家ディーステルヴェークの幼児教育思想を述べていくにあたり、まず当時のドイツの幼児教育界の概略を紹介することからはじめよう。

一八三〇年代に後進国ドイツでもはじまった産業革命は、幼児の世界にも影響を及ぼさずにはおかなかった。すなわち、婦人や時には幼児さえもが工場に働きに出ることで家庭教育は崩壊し、子どもたちの道徳的墮落や身体的不具化や発育不全がおこるといふ状況を呈していたのである。このため、母親が安心して働きに出るよう、また子どもたちの道徳的、身体的傷害が防止されるようにという意図をもって、幼児学校や幼児保護施設といった幼児教育機関が設立されていた。しかしこれらの幼

児機関の大部分は単に社会的危機の軽減のための手段として作られたものであり、いわば社会政策的な所産にとどまるものであった。これに対しフレールベルは、そのような社会状況をふまえながら、さらに教育学的見地から「幼稚園」という新しい幼児教育機関を設立した。彼は幼稚園で、幼児期の発達特性の認識にもとづいて、遊びと作業による教育を行なおうとしたのである。フレールベルのこの幼稚園で、自己の理念が実現されつつあるのを発見し、これを広汎な文筆活動を通じて宣伝したのが、本稿で扱うディーステルヴェークである。

ディーステルヴェークが幼児期の教育に関心をよせるようになった要因として、二つのことが考えられる。その一つは当時の幼児教育理論や実践の高揚である。すでにルソーやペスタロッチらにより教育対象としての幼児の発見がされていたが、当

時の幼児教育はこれを継承し、実践し、それによって理論的にも実践的にも非常な高まりを見せていた。その頂点に立っていたのがフレーベルであった。ルソーやペスタロッチの教育思想の継承者を自認するディーステルヴェークは、すでに早くから幼児期教育の重要性をみとめていたが、フレーベルとの関係がその関心をさらに強いものにしたのである。第二には、産業革命下での家庭教育の崩壊への対処であった。

とはいえ、ディーステルヴェークは正確に言えば幼児教育の専門家ではない。彼の主関心は国民学校にあり、そのための科学的な学校教育学を確立することに力をそそいだのである。そのため系統だった独自の幼児教育論を展開するまでには至らない。彼は主として幼児教育機関やそれとの関連で、将来の母を教育するための女子教育に眼を向けたのである。

ディーステルヴェークの幼児教育論は以上のような限界をもつから、本稿では次のような構成をとる。

〔一〕教育論の基本原則 ここでは最も基本的な原理をあげるが、この中で幼児教育論の基本になるものについてわずかばかりふれる。〔二〕幼児教育論 フレーベルとの出会いが重要であるので、一八四九年以前と一八四九年以後にわけて述べてみたい。

〔一〕教育論の基本原則

《自己活動》

ディーステルヴェークの教育論、人間論の中核になっているのは自己活動の原理である。自己活動が教育のよしあしをはかる尺度にさえなっている。彼のいう自己活動とは、自由な自己決定による自主的、自発的、主体的な活動であり、しかもそれは、何か高い目標と発展をめざしての活動である。そしてこのような自己活動は、人間のうちなる本来人間的なるものであると同時に、人間的なるものすべて、自由や個性を生み出す根源なのである。

基本的には右のようなものであるが、彼のいう自己活動は広い意味をもっている。また低い段階の自己活動も高い段階の自己活動もある。彼は自己活動は人間が生まれながらにもつ衝動にもとづいてるとみているが、この意味では乳児にも自己活動はある。しかしこのような自己活動は、教育によって最も高い発展段階にまで高められなければならない。高い次元の自己活動とは、たとえば、精神が自由な自己決定に従う段階での精神の活動をいう。さらには、社会の機構や習俗から自由であることも広い意味での自己活動である。当時のような市民社会の

成立期においては、自主的、主体的な人間、自由な思考のできる人間が要請されていた。この意味で、ディーステルヴェークの教育論は市民階級の教育論であった。

自由な自己活動などの高い次元の自己活動は到達されるべき目的である。この意味では自己活動の原理は目的原理である。

しかし同時に、人間諸力が結局自己の努力と活動によって発展しなければならぬものであるとする彼の考えからすれば、自己活動の原理は方法原理でもある。ディーステルヴェークの考えた授業においては、子どもの自主性、自発性、自由的思考がもとめられ、それを通してまた、自己活動の能力が陶冶されるのである。

以上の自己活動の原理は、全くの形成的原理であって、これに内容原理を結合しなければならない。ディーステルヴェークは、内容原理を「真・美・善」として設定し、この両者をあわせて「真・美・善に奉仕する自己活動」①とし、これをもって人間がめざすべき使命であるとしたのである。

《合自然の教育》

ディーステルヴェークの「自然」は、ルソー、バゼドー、ペスタロッチを経て発展した主観的自然主義の流れをくみ、主と

して人間主体の側の自然と解されている。合自然の教育とは、この主体の本性のままに、しかも本性にのっとった方法によって行なわれる教育なのである。そこで次のようにいう「人間教育においては、一般的にいえば人間の自然本性に、より個別的にいえば個性に反したことは何ごともおこりえない」②

合自然の教育原理でまず問題となるのは、発達の問題である。ディーステルヴェークは、人間の中に活動や能力の可能体としての素質をみた。これらの素質が刺激によって十全に、調和的に発展することによって活動力や生きた能力になりうると考えた。

ところで、ディーステルヴェークによれば、各個人のもつ素質には種類、程度、エネルギーにおいて多様なものがあり、それらはすでに生れつき決定されているものである。しかも人間の能力、活動は素質がある程度だけしか発達しないものである。これらのことから、彼は、個人の発達可能性はあらかじめ予定されていて、後天的には改変しえないものと考えていた。

このような所与の素質が十全に、調和的に発展するよう刺激するのが教育である。しかし、発達や陶冶は本来的には「他人によって与えられないし、他人からは分与されえない。それらに関係しようとする者は誰でも、自分自身の力と努力で獲得

しなければならぬ」③他人はただ誘発できるにすぎないのである。このように、ディーステルヴェークは素質決定論、自己教育論を主張したのである。

もう一つ、ディーステルヴェークの合自然の原理での特徴的なことは、それが人間性に対する楽天主義で貫かれていることである。子どもはその自然本性の中に本質的にエゴイズムをもつ自然のエゴイストであるとしている。だが、このエゴイズムは、すべての子どもにまず自分自身への配慮をさせるもの、自分の欲求や欲望を自覚させるものなのである。子どもが他人のために配慮するというのは、ディーステルヴェークにとってはむしろ不自然なことであった。この点彼の見解は、自愛心を道徳的行為の源泉とみるルソーに近い立場であり、ペスタロッチとは異なっている。また、人間を生れつき墮落したもの、原罪をもつものとみる正教会の教育観とは激しく対立した。

《発達段階》

ディーステルヴェークは、次のような基本的な発達段階を設定した。④

(1) 感性の段階

最初の段階。精神は外からの刺激や外からの作用への反応と

して活動するだけである。外からの刺激から独立した内からの活動はありえない。子どもは瞬間的に作用してくる力に身をゆだねる。そして表象系列、一定の情緒、習慣や傾向性は形成されていない。この段階では人間は、道徳性に関しては無垢の状態、文化に関しては粗野の状態、一般的にいえば自然状態にある。

(2) 習慣と空想性（ファンタジー）の段階

個々人の中に、認識においては一定の表象系列、感情においては一定の情緒、行動においては習慣と習熟性が形成される。刺激によって生じた活動は継続され、個々の運動間にも相互作用がある。しかし自由な自己活動だけは欠けている。

この段階でのより下位の段階では、想像力はまだ反復的で模倣的であるが、より上位の段階になれば、自由に想像することができるようになる。またこの段階では、一方では、記憶したとおりの思考しかできなかったり、習慣とおりのことしかしないこともあるが、一方では、自由に動きまわったり、自由な、生き生きとした空想や想像をめぐらし、時には空想に心をうばわれてしまうこともできるようになる。

(3) 精神の最高の発達段階、自由な自己規定の段階

この段階に至って精神は今や自立的で自由であり、内から外

に働きかけるのであり、真理のため、善のため、美のため、人生の無限の発展と完成のために活動する。

ディーステルヴェークは、第一の段階と第二段階を生まれてから九歳くらいまでの子どもの発達段階とみた。したがって彼はこの時期の子どもの主な発達課題は、

「子どもの四肢を訓練すること、子どもの感覚器官を刺激し強化すること、直観能力や言語能力を発達させること、生き生きとした空想を行なわせること、換言すれば、子どもの肉体、知性、心情の基礎的諸力を発達させることにある」^⑤

とみたのである。またディーステルヴェークからみれば、無邪気で、健康なよい子どもはほかかなものである。だから、明るいふん囲気の中でこそ精神や身体の動きが活発になり、労働や作業への喜びもわきおこるのである。

《直観教授》

ディーステルヴェークによれば、人間の認識過程は、感覚器官による具体事物の感覚的知覚にはじまり、悟性による概念化におわる過程である。直観による教授とはこの過程にもとづくものである。すなわち、感覚的知覚から出発して、それに精神的作為を加えて概念にまで至らしめようとするものであり、そ

のために対象への配慮がなされる。

ところが、当時の学校で行なわれていた「ことば主義」の教授では、概念であることばから出発するから、知識を得ることはできても事物の本質の認識には至らず、獲得された知識は単なることばの空虚なひびきになってしまう。その結果、子どもは精神的隷属に陥り、自主的な思考力の発展が阻害されてしまうのである。それに対して直観教授は、単に知識の受容を容易にするだけではない。それは、子どもが自分で感覚的に知覚したものに、自分の能力的思考作用（比較、分析、総合）を加え、本質概念を把握するよう導くのであるから、子どもの思考力と自己活動の能力を養うことができるのである。

右のような意味での直観教授の原理にもとづいていくつかの教授規則をあげている。

- ① 近きものより遠きものへ！
- ② 既知のものから未知のものへ！
- ③ 感覚で対象をつかませよ！
- ④ 小さな全体を与えよ！
- ⑤ 具体事物からことばへ！
- ⑥ 特殊なものの知識から一般的なものの知識へ！

①については出発を子どもの身体にもとめることには反対している。子どもの認識対象として自分の身体が最も近くにあるものではないと考えたからである。幼児期の直観教授について

は、あまり早くから思考力を養成しようとするものや、直観の対象が不適当なものには反対している。

そこで一八二九年に、幼児学校および民衆学校最下級生のための直観教授について提案している。最初のものだけをあげてみる。⑥

一 教室内にある対象についての知識

1 教室内の対象の名前をいったり、描写したりする

2 今まで観察した対象の比較

3 規則的な物体の観察

なお、フレーベルの幼稚園でみた直観教授には高い評価を与えている。

《遊び》

幼児のもつほがらかさや明るさ、無邪気さや快活さを失なわせないで身体訓練や感情訓練、心情陶冶や精神的（知的）陶冶を可能にする子どもの活動を、ディーステルヴェークは遊びにみいだした。とくにフレーベルの遊びの中で「愛や真心、友情や協調性、全体への結合がもたらされ、共同体への従属がなされる」⑦また「注意力が発達し、話す力、歌う力、聴く力、理解する力、従う力が陶冶され、機敏さ、活発さ、活動力が生ず

る。つまり、幸福でエネルギーな生活を条件づけるすべての諸特性が生ずるのである」⑧このように考える時、遊びのために配慮することが教育者の課題となるのである。「子どもの生活は遊びである。遊びと子どもは同一のものである。遊ぶうとしない子どもはもはや病気である。それゆえ子どもの発達と陶冶は遊びによっておこる。そこで子どもの本性に応じて発達させ、陶冶する、合目的な魅力ある遊びのために配慮することが子どもの教育者の課題である」⑨

ディーステルヴェークはもともと遊びの教育的意義を高く評価していたが、フレーベルに傾倒するようになってからは、フレーベル的な遊びをとくに強く主張するようになった。

それではどの点に意義を見いだしたのだろうか。第一に、遊びを通して健康な子どもの中にある生き生きした活動衝動は作業衝動へと高められるということ。また、幼児期の遊びや作業によって高次の創造的活動に発展させるのである。第二に、とくに幼稚園での遊びの意義である。幼稚園は共同体であり、共同体での遊びを通して、統一国民国家の将来の望ましい市民を教育しうるのである。「早くから子どもを調和的に組織された共同体に入れ、それになれさせなければならない。幼稚園はそのような調和的な統一体である」⑩そのような共同体の中で

の遊びでは、子どもの最高の遊び道具は他の子どもであり、その中で友情や愛を学ぶのである。第三に、共同体での共同遊びは生活との結合を可能にする。遊びの中で「子どもは自分を忘れ『大人』を演じることがよくある。子どもは幼稚園の中で、後には意識的に体験する生活を演じているのである。かれの遊びは人間生活の予行演習である」^⑪

以上のように、ディーステルヴェークの遊びについての見解は、フレーベルの幼稚園での遊びを紹介したものが多い。しかしここで指摘しておかねばならないことは、フレーベルに濃厚なロマンティックの影響を払拭して、合理主義、啓蒙主義の立場から、遊びそのものに意義をおいたということである。

〔二〕幼児教育論

(1) 家庭教育の崩壊と幼児教育機関

ディーステルヴェークにとって、家庭は本来子どもの素質を発達させるための大地であり、大気なのであった。ところが現実には、非常に多くの家庭で家族の尊厳さがほとんど最後の痕跡まで消え失せてしまっていた。そして教育することの喜びよりも、苦痛を感じる家庭の方が多くなってしまっていた。ディーステルヴェークは、この現象は富裕階級の家庭にもあてはま

るとみていたが、ことに深刻だったのは下層階級の家庭の場合であった。貧困と悲惨、児童労働は貧民の子どもたちからかれらの「人生の春」を奪っていただけではない、家庭教育を可能にしていたのである。彼はそのことを次のように述べている。少し長くなるが、彼の、子どものおかれた社会的状況への確かな洞察眼があらわれているので引用する。

「人口稠密な工場都市において、大抵の工場労働者の子どもは、悲惨な状況のもとであえぎ、敗れ、身体や精神をだめにしているが、人々はその貧困状態のみを考える。不幸な両親は毎日パンの心配をしなければならないから、そのために最も神聖な義務を怠り、小さな子どもを腐敗した空気の中でほとんど監視もせずに放置せざるをえなくなっている。そして子どもたちは、成長する前にすでに、かれらの家庭の収入の不足を補うために工場労働を強制されている。身体も精神もうまく成長せず、早くから、身体的な病弱や精神的弱さ、あらゆるハンディのものとがつくられるから、どんな家庭的幸福も、どんな市民的幸福もありえないのである。このような状況が存在するかがり、工場は大いに金をその地方にもたらす、しかし大抵は、多量の金は工場主のふところにだけ入って、工場の中では多くの不幸な大人や子どもが生活している」^⑫

このような状態を救うための施設として、幼児学校や幼児保護施設などとよばれる幼児教育機関があった。そういった施設では、子どもの道徳的墮落や子どもが将来無能力で怠惰な市民となるのを防ぐべく、宗教道徳教育が重視された。また施設によつてはかなり早期の知識教育が行なわれたり、手労働が行なわれた所もあり、将来の有能な労働者をつくるべく身体訓練も行なわれていた。このような幼児教育機関に対してディーステルヴェークは不満を表明している。

たとえば幼児学校について見解を述べたカール・ジョンという人を批判する形で、次のような指摘を行なっている。⑬ ①

宗教教育に頼りすぎていること、②道徳的悪影響から子どもを守ることを主目的にしているようだが、幼児学校の目的はむしろ、身体的不具化を防ぐこと、身体を強くしたり逞しくしたりすること、注意力や話す能力、活動力を覚醒することにある。

③幼児学校では本格的な授業にあまり重きをおくべきではない。直観教授であっても、その直観の対象には生徒の身近にあるものを選ぶべきである。

このような不満をもちながらもディーステルヴェークは、当時のとくに下層階級の子どもたちのおかれた逼迫した状態の認識から、幼児教育機関を絶対必要なものとみたのである。そこ

で次のような教育条件の整備を要求している。第一に、広い遊び場所（身体訓練と明るく楽しい遊びのために）第二に、幼児を合目的に、教育的に活動させるための教育学的教養ある有能な教師や校長（その際、教会関係者が教師や校長を兼ねることには反対している）。

今までみてきた考え方には、フレーベルの幼稚園の考え方と通じるものがあるが、一八四九年以前には、フレーベルに対して消極的評価しかしていなかった。むしろフレーベルの遊びと作業の体系に関する諸論文（たとえば『さあ、子どもに生きようではないか』などをあげている）をいつも懷疑の眼をもって受けとめ、「常規を逸した見解」⑭とみていたのである。とくにフレーベル派の人々が、球や立方体などの「恩物」による遊びの中で世界法則が把握されると考えていたことに対し、幼児はそのような状態にはないということ、遊具にあまり大きな意義を与えずにいることを指摘して、この見解を批判したのである。

②フレーベルの幼稚園への共鳴

フレーベルとディーステルヴェークとの最初の出会いは、一八四九年七月リーベンシュタインであった。フレーベルはそこ

で保母養成所を兼ねた幼稚園を開き、すでに七十歳近い老人でありながら常に喜々として幼児たちと遊び戯れ、村人から馬鹿老爺のあだ名をもつて呼ばれていたような人であった。農民の子どもたちと遊び戯れているこのようなフレーベルの姿に感動し、滞在予定をのばして三ヵ月間、毎日のように幼稚園を訪問し、保母志望の婦人たちの授業に出席したり、かの女たちと一緒に散歩したりした。

ディーステルヴェークはフレーベルのどこに傾倒したのであらうか。

まず、フレーベルが高齢であるにもかかわらず、もつとも真面目な、もつとも良心的な感性をもった人間であり、しかも幼児たちと一体となって喜々として遊び戯れる、その人間性に対してであった。次には、フレーベルが神学の教皇権から解放された自然科学者の態度をもつて、自然の探求者として人間自然の法則をよく認識していると考えたのである。ディーステルヴェークにとって、教育学が科学となり、教師や教育学者が人間自然の研究に入り、人間自然に関する知識を獲得するために、教育学が一般の世俗科学同様、神学の教皇権から解放されることは、必須の前提条件であった。彼はフレーベルがよく子どもを洞察しえていることについて次のようにのべている。

「かれの子どもについての驚くほど豊富な知識、子どもについてののはかり知れないほどの経験、子どもが表現することへの深い解釈、かれによって発見された教育―陶冶手段の美しさ、有効性、みごとさよ」¹⁵⁾

以上のようにフレーベルを直接知って以後のディーステルヴェークは、彼自身の教育学的理念に一致するような幼児教育は幼稚園において実現されると考えたのである。彼は「フレーベルの幼稚園といわゆる幼児保護施設を混同してはならない」¹⁶⁾としばしば述べている。幼児保護施設や幼児学校は、彼によれば、道徳的、身体的に子どもを保護する目的をもったものであった。その意味では積極的な教育機関としては機能していなかったのである。またこれらの施設には、両親が養育できなくなった家庭の子ども、すなわち労働者や小手工業者、貧困者の子どもが収容され、子どもたちは早くから夜遅くまで長時間施設にいた。

このような施設に対してディーステルヴェークは次のような点で幼稚園の長所を見いだしたのである。

第一に、幼稚園は子どもの発達を合自然的方法で積極的に促進しようとするものである。そこで、運動遊びによる四肢の強

化鍛練や感覺器官の訓練が行なわれる。また「恩物」、たとえば球や正六面体のような単純にしかつ子どもをあきさせないような遊具による作業や遊びを通して、子どもは物を組み立て、何かを表現し、創造する能力を陶冶されるのである。さらにまた、ディーステルヴェークは、道徳的害悪から守るために教訓を与えたり、教義問答書を暗記させたりするという特別の訓育（道徳教育）には批判的であった。ディーステルヴェークにいわせれば、幼児期の家庭教育では、教訓や懲罰によってではなく、家族が直接に、静かに、沈黙して、その人格的作用によって訓育する。また、学校では、教科教授の中での、真理獲得の過程や教師の真理探求の態度が生徒を訓育する。この考えから、彼は幼稚園でも特別の道徳教育は必要ないとみたのである。この主張がとくに現実性、有効性をもってくるのは、いわゆる宗教教育、宗派的な教育に対する鋭い批判においてであった。

第二に、幼稚園にはすべての階層の子どもが通園することである。はじめてリーベンシュタインの幼稚園を訪問した時、身ざれいななりをした子どもも、みすばらしいなりをした子どもも一体となって遊んでいるさまに、ディーステルヴェークは深く印象づけられたようである。そしてこのような印象から民衆幼稚園を構想するのである。

第三に、幼稚園は家庭と学校の間であり、一方で家庭の教育課題を促進しながら、他方で学校教育のための最高の準備を行なうものである。家庭との関係に關していえば、ここでは子どもの無意識で自然な生活を妨げることなく、また子どもを母から離してしまうこともなく、子どもを毎日数時間だけ幼稚園で過ごさせ、家庭の教育課題が幼稚園の援助で解決されるよう配慮している。この点ディーステルヴェークはフレーベルを、「居間の教育学」のペスタロッツと、国民教育舎で両親から離して教育しようとしたフィヒテとの中間に位置するものとみている。また学校教授との關係については次のようにいつている。「実物教授の方法は今はじめて根づくことができる。なぜなら、幼稚園の子どもはたくさんさんの最も重要な直觀表象を持って学校に来、そのことによって教師から骨の折れる仕事を軽減するのみならず、教師が抽象的教授を放棄するよう幾分かでも強制するからである」⑬

第四に、すでに「遊び」のところで述べたように、幼稚園が共同体的性格をもっていることである。

第五に、幼稚園では保母志望者のみならず将来の母が陶冶される。幼稚園で、将来の母は、子どもと接したり、客觀的に觀察したりする中で、子どもを知り、子どもの氣性や心情特性や

努力を正しく判断し評価する能力を形成していくのである。ディーステルヴェークの幼稚園普及活動は、将来の母のための女性教育運動と一体となって行なわれたのである。

一八四九年の「フレーベルとゲーテ基金」という論文の中で、フレーベルの幼稚園や女教師養成所と提携する形で、女性のための一般教育陶冶施設を設立することを提案している。以下にそれがあげた理由を列挙してみよう。¹⁸

1、いわゆる教養ある階層では、婦人の教養と男性の教養との間に不均衡がある。

2、自分たちの小さな子どもを養育したり、教育したりするために必要な、母や娘に対する指導が不足している。

3、家族間の最初の、美しい、高貴な関係つまり家族の尊厳が失われてしまっている。

4、乳児を養育する女性を養成するための系統的な準備が不足している。

5、良家の娘が、施設や家庭で教師になるために必要な教育の機会が不足している。

6、すべての階層の子どもが、生まれてから学校にあがるまでの間に、合自然的に発達することができるといふ状況にはない。

以上にあげた理由の中で、ディーステルヴェークは、良家や

教養ある階層の女子をとくに問題にしている。ここには、ディーステルヴェークの市民階級的立場があらわれているといえよう。

以上みてきたような見解にもとづいて、ディーステルヴェークはフレーベルの幼稚園を宣伝し、その普及に尽力した。またそれだけでなく、自らもハンブルクの幼稚園の設立に関係したり、ペスタロッツ基金でベルリンに最初の幼稚園を建てたりしたのである。

ところが、一八四八年の三月革命に対する反革命の成功後、五〇年代に入ると、政府は、宗務相ラウマー——枢密顧問官シユティールによる本格的な反動教育政策をおし進めていった。

フレーベルの幼稚園もその犠牲になったのである。すなわち一八五一年八月の「幼稚園禁止令」の制定である。プロイセン政府にとって「ペスタロッツに源をもち、ペスタロッツ以上に子どもたちの自由な創造エネルギーの解放と育成を強調する」¹⁹ フレーベルの教育思想や、特定の教育、宗派教育を行なわない幼稚園の教育実践は、危険この上もないものであった。さらに、幼稚園を盛んに宣伝しているディーステルヴェークこそは、当局にとっては、「まやかしの教育」によって「非宗教的大衆蒙智」

をもたらし、革命の根本原因をつくった、最も憎悪すべき人物だったのである。

ディーステルヴェークはもちろん断固として反対した。「幼稚園禁止令」は、彼やフレーベルが行なっている子どももの合自然的な、自由な、発達をめざす教育に対する敵対である。また、宗派の争いから独立することによって真に教育的でありうると考えている者に対しての教会権力の介入であった。そこでその年の十月には、リューベンシュタインで、ビュローロー夫人や、フレーベルの教育論に賛同する小学校、幼稚園の教師などと一緒に、禁止令反対の集会を開き、声明書を発表したのである。

むすび

今までみてきたように、勃興期の市民階級を代表する教育家ディーステルヴェークは、幼児教育を市民の陶冶の重要部分としてとらえ、しかもそれを彼の教育論の眼目である国民学校と結合させている。その際彼のめざした市民とは、教会および政権に盲目的に服従する愚鈍な人間ではなく、教智にあふれ、自由に思考できる人間、不断に進歩する自己活動的な人間であった。

彼は幼児期固有の教育的課題を認識していた。それは、子どもを単に道徳的墮落や身体的傷害から守るとか、逆に過度な知育をするとかいうものではなくて、もっと子どものもつ豊かな可能性を信頼した積極的な課題であった。そしてこの課題を解決できるのは、子どもの活動衝動にもとづいた遊びであった。子どもにとって遊びは自己目的でありそれを通して子どもは合自然的に発達するのである。彼はフレーベルの理論や実践に依拠しながら遊びのもつ教育的意義を強調した。そしてこのような理念を最も理想的に実現してくれる幼児教育機関が幼稚園であった。彼はもともと家庭にこそ幼児を教育する本来の力があると考えていたが、幼稚園を知ってからは、両者が協力しあって教育課題を解決すべきだと考えるようになったのである。

ディーステルヴェークは幼児教育の専門家ではなかったから、もっぱらフレーベルの理論に依拠し、宣伝しながら自己の見解を表明した。しかし、ディーステルヴェークは「あまりにも合理的で、生活、特に宗教的、道徳的生活の非合理性に対する理解が欠けている」²⁰とさえ評されるほど合理主義者、啓蒙主義者であった。それに対してフレーベルは、人間に内在する神性を明瞭に自覚し自己の生活のうちに実現することをもって人間の使命であるとしていた。ディーステルヴェークがこのような

フレーベルを正しく理解しえたかどうかは問題となろう。しかし難解なフレーベルの理論から神秘主義のヴェールをはぎとつて、実践に有効なように明解に説明し、実践化を容易にしたとも考えられるのである。

ディーステルヴェークが独創的あるいは系統的な幼児教育論を展開しえなかったことは彼の弱点である。その点彼は幼児教育史上にそびえ立つ教育家とはいえない。しかし幼稚園創設期に、教育科学の確立、国民教育の確立、教員養成の充実、幼稚園の普及を、同じ性質の切りはなせない問題として論じ、また実際にも活躍した彼の功績は見のがせないだろう。

(広島大学大学院)

アドルフ・ディーステルヴェークの生涯

一七九〇年一月二九日、ヴェーストファリアのジークンで生まれる。大学では数学、哲学、歴史を学ぶ。一八一三年からマイン河畔フランクフルトのモデル・スクール教師になり、ここでペスタロッチの後継者たちと交際しペスタロッチ思想に触れる。一八一八年、工業都市エルフェルトのラテン語学校副校長になる。この地で労働者、ことに年少労働者の極度に悲惨な状況をまのあたりに見て強い印象をうける。また、人々から「ラインの師匠」と尊称されて

いたウィルベルクの指導する教育問題の研究会に出席し、教育問題に深い関心をよせるようになる。一八二〇年、ライン河畔メルズに新設された師範学校の校長に就任。当時、ドイツの師範学校は創設されたばかりで極度に悪い状態にあり、それを改善するために彼は苦闘し、猛烈な勉強をする。この中で一八二七年には教育雑誌『教育と陶冶のためのライン時報』を発刊する。この雑誌は彼が死ぬまで発行される。一八三二年、創設もないベルリン師範学校の校長に転任。彼は気力にあふれた厳しい教師で、自己自身にも生徒にも徹底した予習と自己規律を要求する。厳しい授業の中で、生徒たちは基礎的な広い知識を学び、教材を批判的に検討し研究する能力を身につけていく。一八三五年、『ドイツ教師のための教授指針』を編纂、一八三六年には『文明の生活問題』を出版。このころからペスタロッチ主義教授法に本格的に傾倒し、一八四五年、ペスタロッチ生誕百年祭を挙げる。しかし、一八四〇年のローマン主義者フリードリッヒ・ウィルヘルム四世即位後、彼の啓蒙主義的、合理主義的思想は次第に文部当局の不興をかうようになる。ついに一八四七年二月、社会主義的、共産主義的傾向のかどで休職を命ぜられ、七月に退職する。一八四七年三月、ドイツ三月革命、ディーステルヴェークにとっては、ドイツ民族がその国民的使命に眼覚めたという意味で「真の民族の春」であった。七月、プロイセン国民議会左

派議員たちの招きで憲法の教育条項作製の審議会に参加する。しかしまもなく反革命が勝利し、反動の嵐が吹きすさぶ。一八四九年夏、フレールとの出会い。一八五四年、「プロイセン三条令」が公布され、これに対する反対運動をくり広げる。一八五八年、下院議員に選出され議会の中で民主的教育の実現をめざして戦う。一八六六年七月七日、国民学校とその教師のため生涯を捧げた闘士ディーステルヴェークは最後の眠りにつく。

参考文献

- ① F・A・ディーステルヴェーク『ドイツ教師のための教授指針』フォルク・ウンント・ヴィッセン、一九六二年 S・59
- 長尾十三三訳『市民社会の教育』明治図書、一九六三年、P 17
- ② 同右 S・248
- ③ 同右 S・101
- ④ 同 S・116ff
- ⑤ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第八巻、フォルク・ウンント・ヴィッセン、一九六五 S・166
- ⑥ F・A・W・ディーステルヴェーク『教育指針……』S・362
- ⑦ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第九巻、一九六七年 S・66
- ⑧ 同右 S・66

- ⑨ 同右 S・66
- ⑩ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第八巻、S・167
- ⑪ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第九巻、S・66
- ⑫ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第二巻、一九五七年 S・390
- ⑬ 同右 S・389
- ⑭ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第五巻、一九六一年 S・501
- ⑮ 東ドイツ、ディーステルヴェーク委員会編『ディーステルヴェークと現代』フォルク・ウンント・ヴィッセン、一九六七年、S・147
- ⑯ F・A・W・ディーステルヴェーク『全集』第九巻、S・286
- ⑰ カール・ハインツ・ギュンター他『就学前教育史』、フォルク・ウンント・ヴィッセン、一九六八年、S・176
- ⑱ ゲッツェ「アドルフ・ディーステルヴェークとフリードリッヒ・フレール」『教育学雑誌』第862号、一九二一年、S・11¹⁰
- ⑲ 梅根悟『近代国家と民衆教育』誠文堂新光社、一九六七年、P 279
- ⑳ 篠原助市『欧州教育思想史(上)』創元社、一九五〇年、P 596

幼児の觀察研究

— 実現しようとする意志を育てること (2) —



津 守 真

前回に、何ものかを実現しようとする意志が子どもの内にどのようなして出現するかを見ることが出来る觀察を示し、考察した。今回は、実現しようとする意志の内容をなすものはどのような性質をもつものであるかを示す觀察についてまず考察する。次に、実現の意志に関連して、保育者の側の問題について、觀察例を示して考察する。いずれも、前回の「安心することからすてきにするこゝへ」実現しようとする意志の出現の過程」のつづきをなすものであるので、それとあわせて見ていただきたい。

二 水と砂と器をめぐるイメージの觀察

— 実現しようとする意志の内容としてのイメージ —

1 器（うつわ）、水、砂

幼稚園の砂場で、ひとりで熱心に遊んでいるSにふれて、そこで觀察者としての私が経験しているイメージを探る。それは、その觀察の内側をなしている子どもの中に起こっていることと同型のものに近づき得るはずのものである。

・ Sは、器（うつわ）に水をいれ、その中に砂をいれる。その表面を手でなでる。

觀察者の側からみた觀察の記録である。遊んでいる子どもにとっては、器、水、砂ということばは、ここでは問題ではない。実際にそれらにふれて動く体験があるのみである。子どもは、へこみのある容器を手にとり、流れる液体を流しいれ、水の粘着力で固められる砂を入れる。子どもの手はそれを自然のうち

に行ない、そのことによるこびを見いだす。私が観察をしていて不思議に思うのは、どうしてそんなに単純なことによるこびを感じるのかということである。

へこみをもった器は、何かでみたされることを待っている。器は、人にとって生きた力をもっている。一歳にならない乳児でも、器を手にするとか何かを入れようとする。それが流動する液体であるならば、器のへりまで一ぱいにみだすことができる。子どもはそれを自分の手でしようとする。手が、満たすという自然の行為に従うまで、何度もうくりかえされる。そこに反復するよろこびが生ずる。

子どもは水と砂をいっしょにする。水は分解する力と、結合し粘着させる力との両方をはたらかせる。水は砂を一粒一粒に分解し、またそれを結合させる。子どもは水を扱うとき、水のような画面の力にふれている。こねるときの水はそのような力をもった水である。

器に水と砂をいれて、それから、その表面を手でなでる。器に水と砂をいれるとき、子どもは自然の素材の与えるイメージに従って、自分もその自然の一部になって動いている。それに つづいて、器にいれた水と砂の表面を手でなでるとき、自分の手で、その表面を滑らかにしようとする意志がはたらいっている。

滑らかにしようとするのみでもなく、場に応じていろいろの変化をつくり出す可能性があるし、子どもの個性によって、ヴァリエーションがありうる。この子どもは、ここで、表面を手でなでて、滑らかにしようとしている。それは触運動によって連続な面をつくることであり、それに伴う感じ方がある。触運動の感じ（イメージ）からいうならば、完全な宇宙は滑らかな球面である。子どもが、器にいれた砂を手でなでて滑らかにするとき、そこに完全さをつくり出そうとする意志をみる可以尝试しよう。

・水を半分くらい入れかえ、手とシャベルをつっこみ、水をもうひとつの器に入れ、水を入れかえる。その水の中で皿を洗う。

水をいれかえるというのは、この操作をもう一度あらたにやり直すことである。一度砂の表面を滑らかにして、その水準での完全さに到達したかに思われたとき、そこに不足する何かものを見いだし、はじめからやり直すことになる。

2 器と形

・砂の入った器を水の中にいれ、それを皿の上に伏せて、型をあけようとするがうまくいかない。何度も試みる。

・その器に、手で水を何度もかけ、両手でふたつの器を合わ

せてみる。ふたつをバケツの中にいれてとり出し、一方の器をとり去ると、器の上にプリンと重ねたような形になる。また器をかぶせて水にいれると、もつときれいな型がぬける。そこに両手で水をたらして形づけ、器をかぶせ、じつとおさえ、また器をとり去ると、もつときれいな形になる。それをハ―イとみんなのところにのってゆく

へこみのある器に何かをいれることは、器のもつ精神的性質から自然に生ずることである。からの器があると、人はほとんど無意識のうちにそこに何かをいれる。器に何かが入っていると、人はそれを取り出そうとする。一つの動きのあるところには、対極となす動きがふくまれている。そしてその両者は反復されて進行する。

器にいれるものが水であるならば、出すときには流れ去る。固体であるならばそのままである。水と砂との結合物であると、器から出すときに、器の形が残る。

器の内側に合わせた形がそこに生れる。器の内側に合っていないなかったり、欠けていると、その形が完全になるように、前のをくずして、何度も試みる。また、手でおさえついたり、滑らかにしたりして、子どもにとって満足のゆくような良い形になるまで何度も試みる。そして完全に近いものができたときに、

ハ―イとみんなのところにのってゆく。ここで、子どもに完全なものをつくらうとする意志がはたらいっていることを知る。

水と砂の結合物は、特定の形をもたないかたまりであるが、子どもの手はそこに形をつくり出す可能性をもっている。最初は、水と砂の自然の素材のイメージに従って、その一部になるところから生まれる形である。おさえ、にぎり、こねている間に形が生まれ出て、子どもはそれにおどろく。それから子どもは、個性に従って、形を作らうとする自由な意志をもつ。そしてまた、あるきまった形に従って、形を作らうとする。

子どもは、器に水と砂をいれてそれをひっくりかえして形を作る。その形があるべきものから欠けていて子どもに満足のゆかないときには、子どもはそれをくずしたり、手でなでて作り直す。何度でもくりかえし、満足するものになるまでやる。それは機械的反復ではなく、形に満ちたものを作らうとする意志をもった試みである。

3 滑らかな世界の実現

・あいた器に白砂をいれる。皿（別の器）を洗う。そこに器をおくが、皿に少し砂がついてよごれるとまた洗い直す。器をさかさにして、しばらくおさえていると、型ができている。すぐにくずして他の砂をいれる。砂をまるめただんごをとり、

その皿の上にのせ、だんごの部分を手でかためる。皿の上に滑らかなだんごをのせたのをもって、「ゆかちゃん」とみせにゆく

子どもは皿に水をかけて砂を洗い流し、水と砂の形をおく。また、手のひらの上で丸くし滑らかにした砂と水のかたまりをおく。そのことを触運動感覚を媒介とするイメージの中におくならば、砂と水をこねる子どもの経験に近づくであろう。物をのせる皿を水で洗って砂が一粒もつかないようにすることは、物をとりまく世界全体を滑らかにし完全にすることである。その皿の上におく物もまた、てのひらで滑らかにまるめた球である。そこには触運動感覚で考えられるかぎりの完全さがある。子どもがそこで実現しようとしたものは、触運動面で滑らかさをもった完全な世界であったといえよう。

4 この観察記録の性質

子どもが何ごとかを実現しようとする意志をもち、それに向かって進み、それに近づく経験は、子どもの生活の中で重要であり、次の生活へと進んでゆくの欠くことができない。その経験は、ひとつの過程の経験であり、前がなければ中がなく、中がなければ後がないというような不可逆な時間の中のできごとである。そのことは、私の前稿「安心することからすてきに

することへ」の中である程度明らかにしたことであり、また、本稿の観察からもみることができよう。実現しようとする意志は、素材のもつイメージを十分に感じることでできる時間と空間を経て、その中に生まれるものである。

実現しようとする内容も、観察された結果がひとつの表現であるような、子どもの内部に感じられているイメージである。それは、子どもの個性により、場面により異なる、その子どものものであって、ここに示したものはその一例にすぎない。別の子どもは、同じ砂場の場面でも、別のイメージをもち、それを実現しようとするであろう。いずれにしても、それは子どもの中に感じとられている范漠^{きんばく}としたものであって、明確な形体そのものではないし、また、はつきりと順序づけられた遊びでもないのである。

三 実現の意志と実現させる者としての保育者

子どもが何ものかを実現しようという意志をもったときに、それが実現できるように助けるところに、保育者の重要な役割があると思う。ある時は、上述の砂場の例のように、保育者は直接関与しないでも、子どもだけの力で実現できる。保育者は、そこで子どもが何をしているのか内容はわからなくても、

熱心に遊んでいることがわかっていけばよいのである。(この場合でも、子どもがひとりで熱心に遊べるような状態をつくり出すまでには、保育者のほたらきがあることは、もはやいうまでもないであろう。また、あるときには、子どもが何ものかを実現しようという意志を起したときに、それを叶えてやるのには、保育者が用意したり、周囲との調整をしてやらねばならず、あえてそうするかどうか、保育者の判断を必要とする場合もある。そして、実際の場面にあたると、子どもが何かをしたいというときに、それがどこまで子どもの心が奥深くに根ざしたものであるのかは明瞭でない場合が多い。次にかかげる記録は、そのような場合の観察であり、そのことから、保育者の判断について考察してみたい。

1 記録

P (4歳7ヵ月) は広告を切り抜いている。Y (2歳9ヵ月) もすわりこんで切り抜いている。K (10歳3ヵ月) は、プラカールで手製の舟の色をぬり、A (5歳11ヵ月) はえのぐでかいている。

Pがえのぐしたいという。

私は、えのぐの用意をしてやるが、筆をさがし、紙をだしなぞ、材料をそろえてやるのにけんめいになる。それから、小さ

い子どもがじゃまをしないようにするので忙しく、それ以上のことはできない。

Pは、水を自分でくんできて、えのぐのふたのとれないのをあけてやると自分で出し、えはだまって自分ひとりでかく、それ以上おとなの手をかけることはない。

Pは一枚かいたら、ぶらぶらして、それから昨日あそんだアートブロックをする。Aもえのぐを終わる。この間約一時間である。

2 この場面での保育者の判断

Pがえのぐしたいといったとき、保育者である私は、一瞬、どうしようかと迷いを生ずる。えのぐをしたいという子どもの希望をうけて、それができるようにするのがよいか、それとも違う道を選ぶ方がよいかという保育者の判断をせねばならない場面である。

ここで、子どもがえのぐをできるようにするには、実際上の障害がいろいろあるだろうということが瞬間的にわかる。AやKがえのぐをつづけられるようにしながら、Pのために筆や紙などの材料を出してやらなければならない。またその間に小さい子どもが、その動きにつられて動き出さないようにせねばならない。えのぐをする子どもが多くなれば、水をこぼしたり、

まわりがちらかることも多くなる。それらのことをするのには、保育者は思い切って体を動かしはたらかなければならない。ひきうけるならば、当然起こることを前にして、あえてそれをするかどうか、一瞬ためらう。

他方、その場面で、Pはえのぐをしたいと強く願っていることが感じとられる。その願いはかなえてやりたいと思う。その二つの世界の間で立つて、どちらにしようかと迷う。そして、えのぐの用意をしはじめる。それからあとは、Pの願いを実現させるための実際の条件をととのえることに追われて、Pがどのように描いているのかをみる暇もない。

しかし、Pは、水を自分でくんでくるし、えのぐのふたのとなれないのをあけてやると自分で出すし、思ったよりもPに対して手がからないうで進行する。えのぐのえも一枚かいただけで終わり、目に見えた成果が得られたとはいえない。しかしあとになって考えても、これでよかったのだと思う。

3 保育における判断について

ここで保育者が自分できめなければならなかったことは、えのぐをさせるようにするか、それとも他のことをするようにするかということであった。それは現実界のことである。そのときに、この場面で保育者に感じとられていることがあった。そ

れは、この子どもがえのぐを通して何かをしたいと願っているということである。その何かは、えのぐでなければかなえられないのか、それとも、他のことでもかなえられるのかということとは、保育者の判断である。そこで子どもが何かを実現したいという願いを起していることがつかめているならば、えのぐをすることにきめるか、あるいはその他のやり方をするが、いずれであっても道が開ける。周囲の事情でいまそれをするのが困難であっても、それがかなえられない子どもに対する同情があるから、保育者の行動には、おのずから次への道が用意されるであろう。そして、この時には実現の意志が叶えられなくとも、次の機会には実現されるであろう。また、いずれを選んだにせよ、保育者にとって手のかかる困難なことはある。えのぐをやるならば、それに伴う労力が、他の道を選ぶならば、もしかするとかたくなに主張するかもしれない子どもを、他のことにさせないがら何かをするというようなことがある。そして、いずれにせよ、子どもが実現したいと願っていることが実現できるようにすることが、教育という大人と子どもとの間の営みの根底にあることの認識が判断の基礎となるとき、現実面だけで判断するのとは異なった行為が出てくる。

「安心することからすてきにするこへ」および「水と砂と器をめぐるイメージの観察」において、実現の願いについて考察した。前者は、実現の願いが生まれる過程について観察し、後者はその内容としてのイメージについて観察した。意志の出現の前段階としての混沌の模索の期間を経て、実現の意志が生まれるのを見ると、それは子どもの移ろいやすい好奇心とか、わがままということではない。その意志の出現には、子どもの側にも、大人の側にも、多くの努力の積み重ねがある。実現の意志は、人間の生活の中で貴重な位置を占めるものであることを、この他にも多くの事例に見ることができる。

その混沌の過程の期間や幅の大きさによって、実現の意志の深さは異なるので、それに応じて現実の判断もまた異なる。だから、えのぐをしたいといえ、いつでもえのぐをさせればよいという固定した公式を作っておくわけにもゆかない。しかし実際保育者として知ることのできることは、何かわからないけれども子どもはこんなにそれをしていてということだけである場合は多いので、それはかなえられるようにするのがよい場合が多いことも事実である。

子どもが実現したいと願う意志が出現したとき、それがかなえられるように助けることが、大人と子どもと共なる生活の根

底になければならず、その実現の経験が発達経験となることを保育観察の中によりとる経験をしておくこと、そしてそれが人間に共通の根源的な動向であることを知っておくならば、現実の具体的判断はこのときの状況によってきまるのでよい。現実の判断はAでもありうるし、A'でもありうる。すなわち、多様な具体的場面にあたって、保育者は迷うのである。根源的動向を知っていて、その上で迷うのである。具体的場面は常に新しく、そこには新しい経験がある。以前の経験と同種の経験が積み重ねられたとしても、自らの中でそれは深められて新たにたてゆく、もしもそこで固定した原則にたてられて迷わないで判断できるようにするとしたら、新たな現象にふれて学ぶ経験を失うことになる。現象は人間に共通根源の動向のあらわれであることを知りつつ、保育者は、常に新たに子どもにふれて学ぶのである。

(おわり)

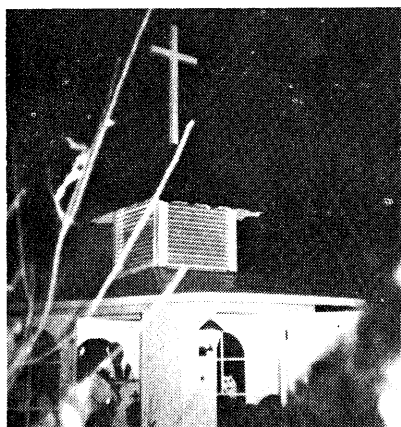
みどり会研修会参加申込み 六月一日～二十日消印まで有効。

往復はがきにヨコ書きで、氏名、勤務園名、園住所、連絡先住所、希望分科会（第二希望まで）宿泊か否か、日光観光希望の有無、を書いてお申し込み下さい。

宛先 東京都文京区大塚二一―一お茶の水女子大学附属幼稚園内 みどり会

わが道をゆく

鈴鹿美和子



こわいもの知らずに独走して、去年十四年間のテレシアの園を閉じました。もう二度と幼稚園の先生になることはあるまいと思うと、今日までいろいろな研究会で受けさせていただいた教えは、何と尊く立派なもので、甘美なあと味さえ残しています。封印してしまい込むには惜しく、いまだに周郷先生の「教育の発明」論に熱気をもやし続けています。手でふれさせ、足でふみしめて、実際に経験させること、芸術をわかる心をどうやって育てさせようか、等々。お正月のために暑い盛りに蒔いた葉ばたんが、何回か移植されて、それらしく美しい白や紫のちぢれた葉を揃えて、なおその一本一本は皆ほんの少しづつ葉のそまり方に差があって、毎朝あかず眺めたこと、誰も種子をまかないのに、春にはつみ切れないほどののびるが自然のめぐみを教え、お迎えの

母親とひとときつみ草のあと、のびるは小さな胸に大事そうにきれいなハンカチに包まれて散って行っただけ。少しでもよかれと思う教育へ努力した思い出は、あたたかく熱く楽しく、時折脳裏をかすめます。ところが静かにふり返ってみると、何か教育者として十分なことをしなかった後悔をふっと感じるのです。

このもやもやの思いは「神不在の教育」だったことを洞察しました。全く申し訳ないことをした——といまさらどうしようもないのに、何か落ちつかないやるせない気持ちにしばらく苦しみました。自然の中でかみさまを語ってきたあの時の素直さの中に、なぜもっともつと入り込んでおかなかったのだろう、今のうちまわってくやんでみても、もうあの幼い素直な日々は、あのひとたちに帰って来ない!!

私のしなければならぬ仕事だったはずなのに。

戦争中に夢多かるべき時期を、ただがつがつと生活に追われたあわれな母親たちは、神への思慕の念など無用とばかりなかなか聞く耳を向けない。けれどそれなりの芸術論があつて、「私たちは大へんな時代に育ちましたから、せめて子どもには芸術性を持たせたい」と思いまして、お絵かきとピアノに行かせてます」と言う。行かせないより行く方がいいかも知れないけれど「魂の無い芸術」のような気がして何かわびしい思いがする。そういう母親に育てられているかあいそうな子どもたち、ああ私にはまだ仕事がある！

そのような思いの最中に、十名足らずの日曜学校に集まり、神様のお話に耳を傾ける子どもたちの教育を、正式にバトンタッチさせられたのです。今

までお手伝いをしたことはあつても、いざ受け持つとなると責任のあることです。神父様のお話を、まるでたのしい寓話のようにのんびり聞く子どもたちに考えさせられました。そしてこの仕事を与えられたことの摂理に対して感謝しました。全く神の全能にただただ敬服すると共に、今まで培われてきた私の魂も、期を得たりとばかり活躍をはじめたのです。ところが教会で聖職者の方々が、にじみ出るものを伝え教えられるのと違い、熱意と努力とつけやき刃的な浅い知識だけでは全く情ないことでした。孤軍奮闘、毎日通う学校は頭の教育を受けるところ、教会の学校はこころの教育を受けるところであると、まず第一回目をスタートしたものの、一年生から五年生までの開きと、神様無縁の家庭教育への抵抗は、尋常一様の宗教々育では歯が立たない

ことを知りました。

そうだ！ あの手と足で理解させよう。

そう決めて、資金のこと、設計のこと、本当に大変でした。子どもたちが入れるだけの広さをまず決めました。小学生の高学年は、円を画く時にさつと力を貸してくれましたし、建築予定の場所に、幼稚園のたいこばしがりかかると力を取り除くのに、経費節約のため職人を頼まず、夫の助けを得て、生徒たち皆で、四すみの、けっこうがらじょうなコンクリート工事をほり起こし、移し運びました。

半経二メートルの円周を六等分してみました。

円筒形では窓やドアがむずかしからうし、四角では面白くなさそうだし、と考へて六角型の建物を建てることにした。子どもたちには、教会を建てよ

う、という話し合いのものである。実際に教会を建てる、ということはいろいろな規約や制約があり、税金のことにまでわずらわしい問題がからまってくる、とおどかされて、あくまでも子どもたちとわたしの間での納得した教会ということにした。あとでの話になるけれど、献堂式の祝別をして下さった成城教会の主任司祭様は、さすがにわきまえていらして、「小さなお聖堂みどうと申しましょうか、かわいらしい祈りの家と申しましょうか——」とこの建物をお呼びになった。

土台のブロックや腰板はり等、子どもたちの手で、と思ったけれど実際はそういう考えは甘く、基礎工事にしろ、棟上げまでの簡単そうな仕事も、とても手は出せなかった。

六角の上に四角い鐘楼をのせる仕事、そのものが大へんな腕のいる仕事であ

ると、棟梁はばやいた。

屋根の骨組みができ、てっぺんに、がっちり十字架が建った時、私は泣けて泣けて仕方がなかった。全く行き当りばったりで、資金などちょうど値上がりの材木代にも足りなかった。でも、持ち前の楽天的な性格と、いつも神様がよいようにはからってくださる、という安心感で「聖旨のままに」と祈りつづけ、ある時、青山の骨董店の店先に、うってつけの釣鐘を見つけ、大急ぎでありつただけの現金を用意し、また駆け戻って、その由緒あると言う舶来の鐘を手に入れた時の喜び！この重いものをよく持って来たと、独りでおかしがった。たしかに鐘をつるす夢は持ったのだけれど、何というところを買うのか、造ってもらうのか、宿題になっている時も時であったのである。

棟梁はこの重さに耐えさせるために、

設計を変えて太い柱を一本横にわたしてくれた。

子どもたちの手におえない仕事は、あっさり頼んで、その間一週間、一、二回あつまって、心の勉強は少しずつ進め、知らない人のために祈ることも覚えた。平行して、ガラスにステンドグラスふうの絵を画く計画を進めて行つた。せっかくハワイの初代教会を模したこの建物に、似合った窓を入れるのは、大へんな仕事である。賀川豊彦師の建てられた古い方の教会を思い出し、子どもたち全員で電車に乗って見に行つたが、それはあまりにもさびしい建物であつた。しばらくして夫に連れて行ってもらつたサレジオ学園の江戸のサンタマリアの聖堂は、反対になんとも絢爛豪華で、金箔のまばゆきは、なぜかわびしくもあつた。

いつの間にか十六、七名にふえた生

徒たちを、四つのグループにわけ、皆で話し合って窓の絵を決めた。ガラス屋に相談に行き、一番安いガラスの寸法のとり方と、こちらの寸法とを考え合わせて60×40を一面に四枚入れるこ



とにした。さつそくガラス戸の形と、教会のそれらしく一番上を半円にした寸法を建具屋に渡し、さてその段階でまだどのようにしてステンドグラスふうの感じを出そうか思案中であった。

油絵の絵具で画く、黒でまわりの線画きをする。ラッカーで画いた方がいい。そのころペンキ屋の主人が、親切そうに教えてくれた。油絵の絵の具もラッカーも教会らしい光を透しませんよ、セロファンを切ってはめ込むのが一番ですよ、と。いくら相手が小学生でも、ちょっと大変な労作である。私はなにげなく、ガラス屋がサンプルにくれた画用紙大のこまかいもようの入った厚いガラス板に、手許のオレンジ色のマジックをこすってみた。お陽さまにかざすと美しく光った。何ということはない。

キリスト像と聖母子像と、大天使ガブリエルと聖女テレジアの四枚の絵は、子どもたちだけの手によって見事に画かれた。マジックインクで。

鐘樓の屋根は、絵本や子どもの絵によく画かれるうろこようにしたかつ

た。一面を原型通り採寸して、十五枚のうろこの屋根にした。一枚一枚、下図通りに重なりを考えて、鋸で切った。サンドペーパーでまわりをなめらかに仕上げた。四面分六十枚のうろこ作りは、いくら四ミリの耐水ベニヤとはいえ、なみ大抵ではなかった。またそれを原型にベニヤを切り、その上に接着剤で一枚一枚はりつけた。

四枚の屋根は、はしごで運び上げ、杉板の上にビニールを二重にはりめぐらし、接着剤で充分とめて、うろこのついた屋根を一枚ずつのせ、釘でうちつけた。ビニール張りから、終始子どもたちはよく手伝い、足をすべらせた——とはらはらし通しの私の心配など知らぬげであった。五年生の女兒は、こういう仕事をほんとに楽しそうに、最後にコーキング剤で雨もりを防ぐ仕事も、チューブのおぼけのようであ

うん力を入れないと出ないのを、お湯であたためたたためよく奮闘した。この生徒は神様の存在を信じないと言っていた。なぜなら、神様って見たこと無いから、と淡々としていた。

最後の仕事は飾りだなでした。

化学繊維の壁材は大へん重宝で、水でとくだけで適當の接着力もあり、たなのまわりを、子どもたちはバターナイフやスプーンのスプーン等で器用に飾りました。ペンキは本職に任せました。いよいよ仕上げのじゅうたんは、工事に見えた愛媛県代表で、数カ月東南アジアを視察して来たという青年の善意で無料になりました。これを聞いた夫

は、さっそくお菓子折でも持ってお礼に行けといい、なお、わが家に目下 unnecessary カーテンとじゅうたん敷の工事を発注した。こういう夫の支えがあったこそ、何事もおそれずわが道をゆけ

るのだろうと思うけれど、ともかく、一人でも多くの子どもに神を憎れること、信じ、愛することを教えたいとねがう。とりもなおさず次の世代の幸せにつながる大事業じゃないかと、今を生きる大人がしてあげられることの一つだと確信する。

筆の走るままにまかせたこの一文の中に、みにくさを感じになりましたらお許しください。二学期になって着手したこの小さな建物は、クリスマスに聖女テレジアに捧げられ、祝福されて、子どもたちのいこいの部屋になっています。

(みどり会)

幼児の教育 第七十二巻 第五号

五月号 定価二二〇円

昭和四十八年四月二十五日印刷
昭和四十八年 五月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします

48年度 現代幼児教育研究会 日程

8月の全国大会は、福島です！

—— 2月例会 —— 盛況裡に終了

場 所 大分市・大分文化会館

日 時 2月11日(日)

会 費 400円

—— 5月例会 ——

場 所 盛岡市・岩手教育会館

日 時 5月13日(日)

会 費 400円

—— 8月全国大会 ——

場 所 福島市・福島文化センター

日 時 7月31日(火)・8月1日(水)・8月2日(木)

会 費 1,000円

宿泊地 飯坂温泉

—— 11月例会 ——

場 所 松山市

日 時 11月11日(日)

会 費 400円

フレーベル館

みんなで走ろう！

キンダーカート



定価 9,500円

全長700mm 全幅560mm 全高450mm

ボディ(スチールパイプ)…黄・青 座板(合板曲げ加工)…橙・緑

☆遊び方

- キンダーカートは1人乗り、自分の番がくるまでおとなしく待つことも、おぼえましょう。
- 排気ガスを出すエンジンはありません。ハンドルにロープをつけて、おともだちにひっぱってもらいます。うしろからおしてもらふのもひとつの方法です。
- 連結装置を利用して、数台を連結して遊びましょう。

☆特長

- キンダーカートは、スチールパイプのボディと、合板曲げ加工による座板からなり、タイヤは本格的ゴムタイヤ使用で、乱暴な扱いにも充分にたえるよう設計されています。
- ハンドルは前輪車軸に直結されておりこれは連結装置に兼用されてます。

キンダースクーター………定価3,300円

全長77cm 全幅23cm 全高66cm

片足を車体に乗せ、片足で地面を蹴って走らせることの出来る安全な二輪車です。バランスを上手にとると軽快に走り、平衡感覚も養い全身を使って遊ぶので、脚力や、腕力もつよくなります。自由にカーブが切れるので遊びの行動範囲もひろく楽しく遊べます。

立ち乗り三輪車………定価5,800円

全長72cm 全幅55cm 全高65cm

三輪車の遊び方をダイナミックなものにしました。普通の三輪車と違って座って漕ぐのではなく、立って漕ぎますので、全身を使って運動するので脚、腕力、腹筋を強くさせる上にも効果的です。前進も後退もでき、自由自在に走らせることができ、楽しい乗りものです。

お申し込みは、もよりの代理店・支社・支店・出張所へ

株式会社 **フレール館**